

芭蕉葉や風なきうちの朝涼
 玉かづらなまりも床しつまね花
 草むらや蠅取蜘蛛の身づくろひ
 鬼百合やりんと開いて蟬の聲
 瘦馬の鞍壺暑し藁一把
 首塚やとげに咲きたる花うばら
 つぎばしのあとは水田の水鶏哉
 撫子の泄は落さじ麻地酒
 麻の葉のあからむ末や雲の峰
 鶴使ひのひる寝の床や蠅の聲
 白雨や鐘きゝはづす日の夕

秋

身の秋や月にも舞はぬ蚊の力
 帷子は日々にすすまじ鴟の聲

あさがほや夜はあけきりし空の色
 やき米に歌こそなけれ近衛殿
 西風の南に勝や天の川
 灸して泣きしも我ぞ魂祭
 送火や後さがりの袴こし
 つねくは後世願ひなり相撲取
 稻妻やなぐり盡して薄原
 はつ鶉時計の六つもうたせけり
 丈山の庵は何處引板の音
 岡崎は祭も過ぎぬ葉鶏頭
 侍の身を露にして月見かな
 月かげや柏手もるゝ膝の上
 人柄も古風になりて黄菊かな
 海老稻も實入る頃とや放生會

稻といふ名も氣がゝりや妹が門
行秋をふらりと蚊屋のつりて哉

冬

廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎

初霜やかつての違ふ酒の畑

板壁や馬の寝かぬる小夜時雨

蒸物のもれてや匂ふ枇杷の花

夜神樂に齒も食ひしめぬ寒かな

甲を干すあたゝかけさや胴紙子

子祭に目貫ほり出す自慢かな

膝つきにかしてまり居る霰かな

初雪に鷹部屋のぞく朝朗

嶽々や鴉とりまはす雪けぶり

長尻の客も立たれし寒かな

さつくと萩も氷も霰かな

鉢卷や穴熊打の九寸五分

(小文庫七部集、有磯海、續有磯海、韻塞、薦獅子集、近古類題集)

文章

小文庫序

木曾の情雪や生ぬく春の草と申されける言の葉の空しからずして、
かの塚に塚をならべて、風雅を比惠日良の雪に残し給ひぬ、さるを武藏
野の古き庵近き長濱寺の禪師は、亡師年頃むつび語らはれければ、例の
杉風かの寺に一の塚をつきて、さらに宗祇の宿り哉と書きおかれたる
一紙を壺中に納め、此塚のあるじとなせり、たれくもかれに志を合せ
て、情をはこび句をになふ、猶師の恩をしたふにたへず、霜落葉かきのけ
て、かたの如くなる石碑をたて、霜枯の芭蕉を植ゑし發句塚と、杉子が歎
き初めしより、愁腸なほあらたまりて、

日のかげの悲しく寒し發句塚

第十五章 千那
第一項 傳記

畧傳



千那像

律師千那は、江西堅田本福寺の十二世にして、法名を明式上人といふ(風俗文選には、妙式上人)同書に、管任(律師)俳諧家譜に、退院曰(感應院)嘗て自ら蒲荷坊と號す、其性穎悟敏達世に蕉門の迦葉と稱せらる、云々、享保八年に寂す、俳林小傳に、四月十七日、七十有三歳なり。

(俳家奇人談)

第二項 作品

松杉にすくひあげたる寒かな
鐘おもしろくゆるたるそがれ

去來 許六

ひたすらにねばる誓の丁子風呂
長い羽折も四五年のうち
吹はれて跡は踊の月まろく
橋までおしてのぼる初汝
いわし網干場を鳶のはなれかね
あみ笠ぐみに入るは何故
神明の花に願ひを開かせて
天高けれど地にもたんほゝ

芭蕉 曾良 千那 來六 蕉良 千那
(袖珍抄)

發句

春

瘦藪や作りたふれの軒の梅
それくの臙のなりや梅柳
海山の霞冥加や生れ國

第十五章 千那

思ひ子を叱るに似たり雉子の聲
二月や身は思はねど押やいと
常齋にはづれてけふは花の鳥
逢坂のかたまる頃や初櫻
紙屑や出代りあとの物淋し

夏

くたびれて三井に歸るか郭公
誰のぞくならの都の閨の桐
御持のはつれなつかし紅粉の花
船引の妻の唱歌か合歡の花
唇に墨つく兒のすゞみかな
夕立にふみなかへしそ渡し舟

秋

秋風や萩のり越えて浪の音

高燈籠ひるは物うき柱かな
名月や無事に穂を出す竿はづれ
菊はなほ捨てし佛の立て枯らし

冬

時雨きや並びかねたる砂ふね
いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥
いにさまに雪駄の時宜や夷講
あつ衾夏の酒債と諷ひたり
寒き日はなほりきひなりたばこ切
おとり越炭盗人や通夜の僧
水滸にまこと見せけり御取越
人を吐く息を習はむ冬籠
せゝられて火桶いそがし冬籠
傾城の飛脚の夢や年の暮

氷魚といふ名こそ惜しけれ年の暮
(七部集、草苜笛、篇突、韻塞、晝寢隨筆)

文章

韻塞跋

日本書紀は天理の腹を窮め、源代物語は人情の實を盡すとかや、今韻塞と題する二卷は李由許六が勝なり、木導汶邨其外羅漢のやうなる者ども、花の雲に遊ぶ月の水にたゞよひて、人一如の俳諧の一揆、赫然として百尺の竿に燈火をかゝぐ、詩歌管絃の舟をかざらば、各身を和げて夢乗ぬべき彼廬山東林の交り、遠法師陸道士、車座に酒のむ顔ならむかし、

(韻塞)

第三項 批評

許六

千那上方の高弟にして、器も勝れてよし、論ずる時は、尙白が器は鈍にして重し、千那は器は勝れでいき過ぎたるなり、花實は花過ぎたり、とり

はやしも得られたり、故に實を愈かくす味あり、風雅二つ、世用八つあり、たま／＼残りたる二つの風雅、八つの世用の盛なるによつて、次第に押領せらる、たとへば脾胃の虚をわづらふ人、虚火の盛んにのぼりて僅の残りたる脾土を焼くが如し、次第に肺氣も弱るが故に、水を増す事難し、久しく師説にはなれて、流行に堀切は出来、八つの世用の火氣は、登るによつて、元氣次第に弱り、病の癒ゆる期はあるまじ、この人の俳諧のいき過ぎたると言ふは、我ばかりは面白う思ふと言へども、人嘗て嬉しからず、たとへば卯月朔日、衣更の日、紙帳を賣り來る人あり、師の曰くこれいき過なり、その年寒うして未だ炬燵を離れず、人の賣らざるうちに賣るべしと思ひて、紙帳／＼といへども、人の氣移らず、是ありがたき譬なり、

(俳諧問答)

第十六章 李由

第一項 傳記

畧傳

李由字買年、律師に任ず、(風俗文選に、居于光明遍照寺)この寺は湖東の平田村に在り、釋名して亮隅上人といふ、近江の堅田に住職す、庭に四根の梅を植ゑ、常に茶事をもて樂みとす、(蕉門諸生全傳に、甚ナ好ム)故に四



李由像

梅庵の號あり、蕉門に遊びて許六、支考、等と友とし、善し、云々、この僧初め翁の風流を慕ふと雖、三昧修行の折柄なれば心ならずも打過ぎたりしが、師の後を繼ぐるの年、法用といひふらし旅立して、翁の庵を訪はれしより、師弟の契深き事、三世の佛に仕ふるが如し、間もなく翁の幻住庵に客居の折を幸しきりに功を積みて俳事を耕し、終に其佳境には入りしとなり、翁粟津に病める頃は、法の師の年忌を物するとして、其臨終にあはずとは聞えし、寶永二年俳林小傳に、六月二十日(蕉門諸生全傳には元祿二年六月二十二日

(芭蕉堂所在三十六人肖像中四景寫)

淵ニテ死ス)に寂す、年四十五、(續俳家奇人談)

血統

姓豫州、河野嫡流也、安藝穴戸ヲ兼合タリ、母ナン止事ナキ藤原ナリ、

(蕉門諸生全傳)

交友

李由は許六とむつまふかく、(蕉門頭陀物語)

笠塚

笠塚の追福こゝろのまゝなり、いでや其笠は、吉野の行脚に狂筆せし、檜笠に櫻の吟なり、(芭蕉が吉野にて櫻見せうぞ檜笠の句を書きつけたる笠を埋めて塚を築きたるなり) (蕉門頭陀物語)

第二項 著書

自著

「約塞」宇陀の法師

許六との共選、許六著書の條を見よ、

第三項 作品

連句

卯の花に祈り過ぎたる曇かな
 雉子啼くあとの豆のひら生
 溝川に晝食くひの鋤つけて
 茶賣の影を娘出て見る
 餘所よりは夜明の早き山の月
 牛ふみ分るくま笹の露
 ヲ初秋や美濃路に入れば米の味
 野郎まはしの宿のつれく
 浪人の女房衆を心がけ
 さいく涼む藪の片側
 湯をわかす釜のあたりを掃くべて
 在所のものゝ呼出しに来る

支 許 李 汝 木 李

考 六 由 村 導 考 六 由 村 導 考 六

五十日寝て居たうちの小借錢

雀しらすの色む岨畑

引つれて馬衣も寒き山嵐

道者わかるゝ關川の月

二三軒家の後の花盛

大きな蟻のあたゝかに出る

ニオ閉張を延して見たる日の永さ

なんにもかゝぬ屏風一双

月雪に飛驒の金森家ふりて

住持に化けた狸煮て食ふ

雇人の半分聞いて早合點

ちぎつて捨てる裾の瓔珞

吹まくる雪隠薦をつかまへて

こちの蘆毛ももう戻る頃

李

李

李

由 村 導 考 六 由 村 導 考 六 由 村 導 考 六

第十六章 李由

三七八

泣くやうな日和模様はこたへたり

千石岩の松の静さ

李

うろく／＼と扶持に離れし鷹の影

上をふさいで普請おちつく

ニッラをついて晝からあがる手習子

祖父をのぞけば目を明て居る

貰うたる赤の強飯のやんわりと

用にも立たぬ口たゝくなり

幾筋も道の付いたる花の影

とつとの空に雲雀まばゆき

(笈日記) (なほ許六連句の條下を見よ)

六 由 村 導 考 六 由 村 導 筆

發句

春

扱の字に韻なきもよし國の春

李

由

春雪や近江燕の見えぬ程

藪入や親なき里の春の雨

下崩の氣色を消すや春の雪

寶引に夜を寝ぬ顔の朧かな

五器箬に離れて出るや一季者

永き日や大佛殿の普請聲

獨活の香に亭主のすゝむ出立かな

簞の五器も抄子も梅の華

寺の名や忘れて梅の花盛り

寺町や向ひ合せの梅の花

涅槃息の來れば紙子もわかれ哉

食にする木の芽も遅し奥山家

結たての髪を撫でたる柳かな

大峰や櫻の底の雉子の聲

第十六章 李由

三七九

第十六章 李由

食ものをしひるも花の都かな
菟蓐の名物とはん山櫻
雛事の續きに遊ぶ花見かな
金の間の庭一ぱいや八重櫻
西行の最負も絶えて散る櫻
海棠や初瀬の千部の眞盛
黒き物一つは空の雲雀かな
行春に昨日も今日も茶漬かな
行春に飽くや干鰯のむしり物
夏
水引で髪結ふ姫や更衣
卯の花や葬禮の夜の顔と顔
苗塚を休み處や飛螢
螢火で見れども長し瀬田の橋

田仕事の中にも清き早苗かな
杜鵑鴨川の水山法師
から獅子の血を干しつけて牡丹かな
笋の勢にむけたり鮓の石
竹の子のきほひや人を待つ日數
蚊の聲の中にいさかふ夫婦かな
夕立やひしくとやむ鳥の聲
村雨や朝露ながら夏大根
蓑笠もあら鶴づかひや川おろし
雲の峰石臼を挽く隣かな

秋

焚立のめしの匂ひや秋の風
雁がねの結び合すや眞野堅田
いが栗の笑ふも淋し秋の山

日蝕の日に食ひ入るや栗の虫
 菜大根に二百十日の殘暑かな
 下帯のあたりに殘る暑かな
 菜畠の一うるほひや秋の雨
 秋の野を遊びほうけし薄かな
 はしり穂を分けて出でけり三日の月
 名月は蕎麥の花にて明けにけり
 屋根まくる暴風の中や虫の聲
 蛤の姿も見えず稻雀
 亡母年回追悼
 同年の尼くづをれて袖の露
 躍るべき程には酔うて盆の月
 食の湯の汗に出でたる踊かな
 松茸に袖の香にとめり菊の酒

菊の花いつも目醫者の匂ひ哉
 むく起や峰の紅葉の朝しめり
 鹿の眼の朝日にむかふ高根かな
 生壁に袖を氣遣ふ夜寒かな

冬

張りたてゝ傘干す晝の時雨かな
 麥糞の土に落ちつく時雨かな
 汝間に鮎死かゝるしぐれかな
 朝寝して出れば小春の天氣哉
 御玄冢も過ぎて銀杏の落葉かな
 達摩忌や時雨て宵の油あげ
 節絹の紺の兀げたる寒かな
 生壁により付き難き寒さ哉
 寒聲を引かする松のあらし哉

澤山に吹革祭のおこし炭
 乗物につかへまはるや大根引
 小若衆に念者きはまる火燧かな
 水鳥も寝あたままるか静なり
 初雪や一面に降る勢田の橋
 はつ雪や奥の洞屋の雪なだれ
 乞食の事いうて寝る夜の雪
 水滌を吹き切つて行く吹雪かな
 向上な乞食のかほや雪の暮
 御鷹野にすくんで居たり網代守
 葬の火をたよりに寄るや濱千鳥
 寒菊や火を焼く方の眞さかり
 肩置の出所かくす紙子かな
 大儀して鍋蓋一つ冬ごもり

煤掃や圍爐裏にくばる番椒
 春近き三年味噌の名殘哉
 袴着ぬ鞆入りもあり年の暮

(韻塞、小文庫篇突、七部集、東華集、笈日記、有磯海、袖草紙、近古類
 題集)

文章

四絶文章序

許氏が五老井に四絶あり、絶は絶勝の義なるべし、ひとつには艸字藤
 二には揚揮豆、三には雲花園、四には紫芝岡なるべし、我問事あり、四は須
 彌の四州によるや、曰く不然、四海四方にあらずば四時四月の四ならず
 や、曰く不然、四恩四教の四にたよらずば四民四姓の四の數によるや、曰
 く不然、四天四睡の四をねがはずば四王四皓の四を羨むか、曰く不然、我
 惘然として問をやめたり、許子が曰く、分別理窟は我有にあらず、若三絶
 五絶の増減あらば吾子が算用は立所に相違すべし、たゞ一二三四の第

四番にあたれば四絶とはいふなり、昔愚なる法師あり、無才にして法名の文字に苦しめり、或人教へて云、まづ法の一字を頭に被らしめて、下はいろはを以てつくべしと、法師大きに力を得て、やがて法以、法呂と段々に名づけて、すでに一二の篇に至り、第六の番にあたり、時にかはらけ賣身まかりて法名たべといへば、法六と改名してやがて取らせぬ、妻子は深く悲しび、たとひ此世の業は是非なし、せめて來世に生るゝ時、此苦患を助けたいといへば、法師頭をふりて、我法名は土のたぐひには非ず、今六の當番なれば是非なしとて、終に法六になしておくりぬ、今予が四絶もかくの如しと、各これを感じて、説賦銘贊の四文を書して、終に五老志にとゞむ、某李由これに一章を加へば、恐らくは五絶とならむ事を知て、やがて四文章の始に序して、この心を述べて此罪をのがるゝのみ、

(風俗文選)

第四項 言論

許六言論條下篇突より拔萃したるもの、中には李由の論も交るな

るべし、

第十七章 浪化

第一項 傳記

畧一傳



浪化像

浪化者、東門主一如大僧正之連枝也、
 號應眞院、俳林小傳に、一號應々山人、居
 干越中井波瑞泉寺、一日遊洛、會芭蕉翁、
 效風雅、後著有磯海前後集、病歿、年三十
 二、俳林小傳に、元祿十六癸未十月九日
 寂、(風俗文選)

入門

一年芭蕉翁の雅情を慕うてある夜

ひそかに落柿舎にて對面して、師弟の酒盃を汲む、(俳家奇人談)

第二項 著書

第十七章 浪化

自 著

「有磯海」

蕉門俳士の發句を選びて浪化が季別にしたるもの、元祿八年編特色あり味ふべし、

「刀奈美山」

有磯海の余力に成れる同門の俳諧集、元祿八年成、其角の序あり、一冊、

「續有磯海」

自己及知人の發句連句を輯めたる書、一冊、元祿十一年、井筒屋庄兵衛上梓、

「俳諧正語抄」

浪化の漫筆なり、佛道を以て俳諧を説きたるものにして趣味多し、羽黒の呂丸の家に傳はりしを、赤谷の湖山取出で來りて鶴岡の荷曉に見す、荷曉これの浪化の書なるを知り、その子琴而が文政十二年に上梓したるもの、一冊、橘屋治兵衛板、

後人の編述

「浪化公終焉記」

和漢文操中にあり、支考の作、

「浪化發句集」

野鶴編、慶應三年成、

「浪化句集」

子規の遺稿俳家全集によりて、虚子が編したる、元祿俳家々集中に出づ、

第三項 作品
連句

千鯉に花こそさかね冬の梅

紙子の襟に唐織の箔

柴垣に掃部の介を呼入て

金の手形の判見せてやる

飲すてし鉢の着に猫の聲

第十七章 浪化

浪 化

北 枝

萬 子

支 考

牧 童

餘所は味増する夕食の空
船に帆の風はなをりて三かの月

鳥もちくと秋を高ふる

山柿に野山のにしき染かけて

檜榔笠の僧たどり行

馬病て東坡は宿に居らるゝか

火燧ざらひの庭の熊笹

酔をかけたやうに冴きる月の影

鹽なき海に水莖の岡

さりとはつらい返事に袖ぬれて

屋敷の首尾を語る中立

上郎衆のそれは奇麗にあやめ草

ひかりとひとつ神瀉の雨

此宮の繪馬に鳩の住あれて

浪

浪

浪

考 子 枝 化 童 考 子 枝 化 童 考 子 枝 化 童

森の下行水に日のさす

坂越る人待居れば花に鐘

ねぶつてあそぶをれが長閑さ

ニオ正月のいなれた跡に餅搗て

今度の家も鬼にかな棒

こゝもとは伊勢の檜垣の旦那衆

堤がきれていかい騒動

猫鳥は南風吹かもめ也

酒の杉葉を船に見かける

一問をあげば御坊のはたらきて

雪のふる夜は燐火なりけり

山里に誰まつ風の吹あらし

狸が來たら鼓打せむ

友達の異名の中に鶴太夫

浪

浪

浪

子 枝 化 童 考 子 枝 化 童 考 子 枝 化 童

葬禮の時みな眞顔也

白露にあかい花咲野の月夜

秋こそ来たれ帷子が辻

ニッきりくす新在家には味つけて

鉢くれさうな竹格子もと

鯛あぶるにほひに飽し夷講

茶の湯でゝるに咲た水仙

五十まで兀ぬあたまる無風流

鉦打すてゝ願以此功德

重箱に南天の葉は合點也

あれが大工にほれた女か

藪入の盆は来たれと藪もなし

折かけふたつあはれなる墓

響むし計になりて月高く

浪

考 童 化 枝

浪

考 童 化 枝

浪

考 童 化 枝

鳥居を棄て出る母衣武者

誰家の子ぞ少年の花の時

後集をちぎる藤に山吹

發句

春

うす鹽の鴨に薺の平かな

心賣りは選屑拾ふ子の日かな

板前に行燈残る若菜かな

鶯と畠で出あふ若菜かな

鶯のなくやくまなき大座敷

鶯に朝日さすなり竹格子

四ッ鶏に晝の朧や風の筋

うぐひすの藪入したり梅の花

(草薺笛)

考 童 化 枝

あら土の畠にちるや梅の花
 鶯に墨のひなたや梅の花
 人でみの中へしだるゝ柳かな
 水鳥の胸に分け行く櫻かな
 糠星も上にくづるゝ花の空
 一本をぐるりくゝと花見かな
 やせ骨を出して雲雀の日和かな
 菜畠や境てりあふ桃の花
 夕日はや春のをしさと疊支

夏

豆腐こそ名のらね山は郭公
 時鳥尻に聞かせて飛脚かな
 時鳥二聲かゝる一枚田
 二三日蚊屋の匂ひや五月閣

白砂やしよろりと生へし今年竹
 翠簾にきて蒸物くさき螢哉
 疱瘡する兒と見えけり麥の秋
 種麻やぐるりに残るやけ畠
 木の下や夜の明かゝる百合の花

秋

秋立や鷹のとや毛のさし残り
 京笠は皆駒曳のもどりなり
 日和よくなるとて夜の野分かな
 踏ばつて畦をこゆる野分哉
 早稻の香や有磯廻りの杖の跡
 稻むしる近江國の廣さ哉
 蕎麥の花なら茶の花はなかりけり
 寝た顔で居るや踊のあくる朝

傘さして参りつきたり寺の月
 名月や土手のはづれのなびき藪
 明月やはらく鶴の俄客
 秋風の吹きぬく舟の世帯かな
 萩の戸やしばし遠慮の翁丸
 おもかげの尾花は白し翁塚
 秋風に吹かれ次第の糸瓜かな
 いらく と 鴉は啼也唐辛
 簀戸たて、晝も啼せむきりくす
 山の端の日の嬉しさや木綿とり
 賑やかに菊は咲きけり初時雨
 牛馬のくさゝもなくて時雨かな
 木枯や片店おろす町通り
 のら猫の聲もつきなや寒のうも

茶の花や鶯の子のなき習ひ
 水仙や藪の付たる賣屋敷
 有明と氣のつく雪の明さ哉
 埋火や障子より来る夜のあかり
 篠懸をたか野にすて、猿藏
 久くで野に出る馬や大根引
 開山忌となりては留守の稻荷山
 翠簾の灯のこぼれてさむし御佛名
 せき候や夕日につく袋持
 待春や机にそるふ書の小口

(有磯海、續有磯海、篇突、韻塞、末若葉、草刈笛、袖草紙、近古類題集、
 笈日記、白陀羅尼、卯辰集)

文章

俳諧發願文

人死して六道に生れ、からき目見むは、ひとへに娑婆の業因によれり
 けるとかや、世に立花すく人は、立てゝは崩し崩して又たて、終日大汗流
 し、鼓のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて、鐵
 釘に打つけ、針がねにし、はりかゝめて、見る目も苦しかるべし、わづか五
 寸の瓶に、千山萬水の思を込め、むも猶々氣づまりならむかし、若立花せ
 むとならば、曾根の松を心に立てながしに、清見寺の梅ならば、少しは心
 のびやかなる風情もあるべし、されど一時の榮花も盡きて、まづ椿ころ
 りと落ちて無常を示し、木槿一日の榮をさとりて程なく凋る、例の心短
 きにや、やがてぬぎ捨て、果は煙と立登る、それさへあるを、碁うつ人は赤
 目引きつり、喰物時を忘れ、終夜同じ事ならべたらむは、飽かずやあらむ
 よき手あしき手とて一座うち舉り案じふくれ、碁石の限り、碁盡す時、例
 の惜しげもなく打崩したるは、さりとは殘多き事なるべし、さしも手間
 入て案じたらむは、せめて五日十日もながめよかし、此人死たらむ後は、
 必ず賽の河原に生れて、父母戀しがる子共に立交はり、地藏おぼさつの

御衣の下にかくれ、明蓉同じ事すらむも又あはれなるべし、若し一枝さ
 して諸佛に奉り、一目投げてはあみだぶ唱へたらむ人は、疑なく西方に
 生れて、百味の外の飲食には、なら茶、蕎麥切は食ひ次第たるべし、今吾俳
 諧の結縁は、狂言綺語のふるみにおとし、百韻千句の數を合せて、一座の
 廻向はあみだぶくと申して仕舞侍りける、(風俗文選)

第四項 言 論

風 雅

大節に臨んでも能く本心の風雅を守れば、死に臨んでも更に變ずる
 事なからむ、死は我風雅の終なれば、其風情を忘るべからず、風人の常の
 樂といふは、天地の變化、人間の盛衰なれば、春秋は榮枯に面白く、人間は
 盛衰に感慨あり、人生れて死せずんば、更に益なし、老少不定にして無常
 の迅速なるこそ嬉しけれ、(俳諧正語抄)

發 句

發句の心得は、月花を愛すれども、念着する事なかれ、飽くまで花を愛

して終には白雲に心を轉ずるの事なり、是を一句の變化とも俳諧の
らみともいふなるべし、

風雅と理とは各別と知るべし、譬へば、確の据ゑ所よし壁の蔭、此句確
のすゑ所よしといふは理にして、下部の口にも言出すべし、壁の蔭は風
雅にして作者の骨折所なり、かくの如くなる時一言萬句にして、萬端發
句にならぬはなし、(俳諧正語抄)

第十八章 涼 菟

第一項 傳記

畧傳

涼菟俳林小傳に、稱岩田亦治郎は勢州山田に在住して、神官なり、蕉門
に遊んで乙由と名を等うす、團友齋或は神風館と號す、云々、一年邊近き
花見ひと、かりそめに草履はきて出て歸らず、人をして尋ねしむるに見
當らず、菟は近所の花より、直に思立て洛の東山へ行き、それより播州須
磨寺の櫻戀しく、又うかくと終に長崎までたどり行きしとなむ、實に



涼 菟 像

無我の雅人と稱すべし、(俳家奇人談)

歿時及辭世

享保二年乙酉四月二十八日終に臨
み、門人辭世を乞、合點ぢや其曉のほと
とぎすと唱へて卒す、(俳林小傳)

第二項 著書

自著

「皮籠摺」

(芭蕉堂所在三十六人肖像中守勝畫)

涼菟が自己の旅行中の句知人の句等を輯めたるもの、元祿十二年、西
村市郎右衛門上梓、二冊涼菟の句を窺ふに宜し、
一幅半、

涼菟が自己及同人の連句發句等を輯めたるもの涼菟の句を見るに
便なり、上下二卷、井筒屋板、

蕉翁一幅半の袖をひるがへし路草亭にて雨の花を興せしあとをな

つかしみ元祿庚辰の春かの紙衣のぬるとも折む雨の花を發句にし
たる歌仙を卷頭におきたりこれ書名のおこる所以

山中集

山中に入湯して撰したる俳諧集なり一冊元祿十七年井筒屋庄兵衛
板支考の序あり

後人の編述

涼菟句集

虚子編元祿俳家々集に出づ

第三項 作品

連句

岩に花猿の物思ふ處なり	涼
春雨ながら雲に日の色	支
更衣ちかしと暇をしがりて	菟
笹折敷ける折のまんぢう	里
	白

桐の葉のすべるばかりに朝の月

聲山雀の里に来てなく

笠提げて垣にたゝすむ秋の霜

餘所の男が知らぬあいつ

何もかもきれいに臺の小盃

空のみどりもけしの散る時

しのゝめの淀たち出でゝいもあらひ

馬で合點の行かぬ上臈

茶を呑で曾祖父と祖母が竹の雪

不思議にのこる連歌一折

錢百を鎌倉の代は尊とがり

此おかはりもとめられて居る

草餅のつまみかげんも上手下手

白いもほしき桃にやまぶき

水	杜	乙	汀	季	蘭	友	涼
市	草	由	蘆	覽	北	朱	菟
						考	本
						白	市
						草	由

殿様の掃除數寄にて家中まで
そなたの戀のさらし賣る聲
か齒黒が何はづかしい晝の月

小萩の露の横に亂るゝ

ニまつ虫の松の扉はさしながら

(百韻なり以下略す)

涼 菟 朱 北 覽 蘆

發 句

春

蓬萊や主人に馴れて鳥の來る
結ばるゝ道の小松や若綠
鶯の音に起あがれ雪の竹
それも應これも應なり老の春
假橋になくて叶はぬ柳かな
梅が香や炬燵を出でゝ遠からず

(三疋接)

赤うなり白うなる梅の甲かな
合羽着て撫ても見たき柳かな
市中や馬にかけ行几巾
寺深しその衣更着の木の匂
くゝ立や水口ならば鯀汁
傾城の島見たがるすみれ哉
十徳で薪して來る櫻かな
花盛り且那落して來るもあり
花盛道具ふらせて上野かな
沖漕ぐは花見心や江の邊
歌で呼ぶ當摩之丞や櫻狩
どちらへも遠き山路や遅櫻
何事を觸れてまはるぞむら燕
橋わたる人にしづまる蛙かな

あらく／＼とかへりかねてや小田の雁

餞 別

見送らん花も霞も汝見坂

花鳥や實にもと思ひ染小袖

歙さげて叱りに出るや桃の花

買物のから名や雛の臺所

大井には子持の君ぞ雛の妾

山吹や羽織の並ぶ橋の上

夏

人中へぞろりと長き袷かな

いにさまに尻たゝかるゝ袷かな

一飛に帷子着るや麥の中

扇打つ黒き背中や雲の峯

馬方の胸髭暑き山路かな

内 宮

拍手の袂も涼し木の雨

外 宮

涼しさのまことは杉の梢なり

さし當る用もまづ無し夕涼

若葉より人ぞ涌出る東山

公達の手習の間や若楓

夏草や屋根に手届くすまの浦

簾から使者を見てやる牡丹かな

扉越に大工造ひや桐の花

あそこへは行かれぬ川の螢かな

屋根うらに螢飛ぶなり須摩の關

日盛や障子に羨ゆる蟬の聲

草深き庭に物あり蝸牛

聲かけて鶴繩をさばく早瀬かな
 郭公小坂一つや朝茶の子
 羽衣の松をめぐるか郭公
 染飯の蠅追うて居る祖父かな
 起きてまた蚊屋につくばふ雨夜かな
 膝立て蚤とる猿や岩の上
 鍵持や船呼びかけて心太
 水賣も只にはあらじ檜笠
 瓜の香や橋の前まで帆掛船
 春秋を知らぬあはれやうちは賣
 糸鬘があかりうけたる祭かな
 あらけなや祭の中をつるめさふ
 のぼり出す藏百姓や門構
 山を見る二階なりけり土用干

秋

星合の空泣くやうに曇りけり
 につこりと帯の日和や天の川
 合掌で湯に入瘦や秋の風
 山口や一こぶしづゝ秋の雲
 力なう暮れて行く日や須摩の秋
 秋寒し岩の上から橋ばしら
 餓鬼の首のかれて盆の晝寝哉
 人聲を風の吹き取る花火かな
 強過ぎて獨轉びや寄相撲
 名月の主人ならましすまし汁
 名月や芝の綱引に好きなもの
 聖堂の庭に詩人や今日の月
 月澄ひや樓にあつまる猿の聲

寝る人は寝させて月の晴にけり
 かたびらに越の日數や後の月
 朝霧の伊吹や富士の妹川
 夜の菊誰やら庭の聲作り
 畠から出て来る菊の主人かな
 身の上をたゞしほれけり女郎花
 後士の寝て流るゝや芦の花
 燃るかた立よる塚や蔓珠沙花
 草臥の相伴もあり長ふくべ
 野の宮の鳥居に菖もなかりけり
 菖の實を馬に食はすなうつ山
 鳥どもに見限られてや散柳
 散りそめて紅葉に寒し東福寺
 かたくまの子猿や柿の下紅葉

先になり後に鳴海やわたり鳥
 初雁や海に向ふ金ヶ崎
 船の灯のちろく時や鴈の聲
 鹿の聲跡はしぐれて明にけり
 寝入かね虫齒に響く碓かな

冬

近付の道具も出たり初時雨
 時雨降る座は静まりぬ相後達
 木枯しの一日吹いて居りにけり
 はつ雪に起きつころびつ亭主かな
 寝見臺雪降る時は起きにけり
 掛物の壁に跡あり冬ごもり
 冬ごもる顔や詩人のかぶり物
 唇の墨はいつから冬ごもり

茶の花や岨の畠のおくび形
 清浄な葉の勢や水仙花
 花一つ吝いことなり冬の梅
 火燧から友呼びつぎの濱近し
 松風にこそつかせたる紙子かな
 毛ふとんや怖い夢見る後夜の鐘
 湯婆から駒の出さうな手つき哉
 旅を行く鷹も頭巾や不二蔵
 あさむつの橋に揃ふや小鷹狩
 鮎つりや今も阿漕が浦の波
 鮎汁や人の心のくどからず
 鉢巻を角に結ぶや大根引
 青き葉をりんと殘して柚味噌かな
 切れ賣の吹かれてありく師走かな

鴨一羽帯にはさむや年の市
 わざくれや三百出して年忘

歳暮

鯛鱈の大津とまりや明日は春

(芭蕉袖草紙、袖珍題詠集、草刈笛、東華集、白陀羅尼、節文集、一幅
 半、俳諧近古類題集、皮籠摺、六の花夜話狂、山中集)

文章

神農像讚

野にも寐、山にも寐る人を、人は神とも佛とも思へど、薦着たる乞食は
 門にも立たせず、この皇いかなれば十善の位におはして、手づかみに物
 はきこしめすらむ、さはいへ春の野あそびには、酢味噌あらばといひお
 きけむ慮外ながらもわれが活計なり
 神農も思へば、皆に野蒜かな

第十九章 桃隣
第一項 傳記

畧傳

號太白堂通稱天野藤太夫伊賀上野人蕉翁を慕ひ東都に來り續俳家
奇人談に甘才官を辭して江戸に來遊
しとあり神田及本石町に住す別號桃
池堂吳竹庵後稱桃翁享保四己亥年十
二月九日没す八十一歳淺草光明寺に
葬る(俳林小傳)

晩年
主従二人朝に粥をすはり夕に糝を
舐りて寛々たり點あれば筆を取る無
ければ錫杖を取て市中にふる佛恩厚ければ曾て飢ゑず世恩深ければ
全く寒からず命の遲速は天にまかせたり(粟津か原)



桃 隣 像

第二項 格

放縱

或方に賓客を饗應すとて此人も其相伴に招かる折節炎熱の頃なれば
一間々々に手水鉢を設け新しき手拭をかけ置きたり客歸りて後打
寄りて掃除するに掛けおきし手拭一つ見えずこはいかにと呆れて一
兩日を過でしける所に此人の許より禮文おこせし末に歸るさは手拭
盗む暑哉とは認めたり云々(續俳家奇人談)

第三項 著書

陸奥千鳥

奥羽に於ける芭蕉の跡を尋ねし紀行中の俳諧を輯めたるもの芭蕉
の句集をも載せたり五卷元禄十年の跋あり
粟津か原

桃隣が蕉翁十七回忌追福のため獨吟及他人の詩歌連俳を輯めたる

もの、一册、寶永七年十月成

第十九章 桃隣

第四項 作品

連句

道くだり拾ひ集て案山子かな
 どんとと水の落つる秋風
 入月に夜はほんのりと打明けて
 塀の外まで桐のひろがる
 銅壺よりなまぬる汲んで使ふなり
 強う降つたる雨のつい止む
 瓜の花是からなんぼ手にかゝる
 近くに居れと長谷をまだ見ぬ
 年よつた者を常住ねめまはし
 いつより寒い十月の空
 臺所けふは奇麗にはきたてゝ

桃 野 利 桃 桃 桃

隣 坡 牛 隣 坡 牛 隣 坡 牛 隣 坡 牛

分にならるゝ嫁の仕合
 はんなりと細工に染まる紅うこん
 錠持ばかり戻る夕月
 時ならず念佛聞ゆる盆の内
 鳴真黒に来て遊ぶなり
 人の物負ねば樂な花をゝる
 もはや彌生も十五日たつ
 より平の機に火桶はとり置きて
 心かひの小言誰も見廻す
 買込だ米で身體たゝまるゝ
 歸るけしきか燕ざわつく
 この度の薬はきゝし秋の露
 杉の木末に月かたぐなり
 同じ事老の咄のあくどくて

桃 桃 桃 桃 桃 桃 桃

隣 牛 坡 隣 牛 坡 隣 牛 坡 隣 牛 坡 隣 牛 坡 隣 牛 坡

第十九章 桃隣

だまされて又薪部屋に待つ
 よいやうに我手に占を置いて見る
 しやうしんこれは合はぬ商
 帷子も肩にかゝらぬ暑にて
 京は惣別家に念入
 焼物に組合せたる富田^{あま}助
 隙を盗んで今日も寝てくる
 髪置は雪踏とらする思案にて
 先沖までは見ゆる入舟
 内でもより菜がなくても花の陰
 ちつとも風の吹かぬ長閑さ

桃 隣 牛 坡
 桃 隣 牛 坡
 桃 隣 牛 坡
 (炭俵)
 坡 牛 隣 坡 牛 隣 牛 坡

發 句

春

桃

隣

七草や序にたゞく鳥の骨
 散る時を騒がぬ梅の一重かな
 鳥に落ちて蛙にあたる椿かな
 鶯の聲に起き行く雀かな
 逞しき松も眠るや春の雨
 蜜の香や七つ曲りて山櫻
 曉の風を見かけて花見かな
 傘さして押合ひもせず花見かな
 見事なる旅の相手や花に鳥
 藤の棚や場を取る琴の乗せ所
 晝舟に乗るやふしみの桃の花
 紅のひかりや桃の二百年
 世の中や大根の花も藤色に

宇津山

山吹を折て掛けばや十圓子

夏

五月雨の色や淀川大和川

蟹を見て氣の付く岨の清水かな

あたりから晝寝の客や夏の亭

聞くまでは二階に寝たり郭公

五日まで水すみかぬる菖蒲かな

蘭の香や角振戻す蝸牛

ひきつくすあやめの跡や田のつもり

桶や笹が島はいり口

一八に言葉もかけず牡丹かな

あたらしき宿の匂や富貴艸

臭ないて夏も更なる青田かな

深川の末や女中の茄子狩

秋

盆蘭盆や蜘蛛と鼠の巢にあぐむ

三日月やはや手にさはる草の露

片庇師の繪をかけて月の秋

宮城野の萩や夏より秋の花

菊の氣味ふかき境や藪の中

紺菊も色に呼出す九日かな

打過て又秋もよし梅紅葉

主まつ春の用意やちり柳

新蕎麥や鬼とも組まむ病上人

冬

木枯の根にすがり付く檜皮かな

鶯かぬ往來や冬の大井川

初雪や人のきげんは朝のうち

市中や木の葉も落ちず富士威

淋しさや吉野を榧に思ふ時

御火焼や鍛冶が傳へし古烏帽子

〔俳諧近古類題集芭蕉袖草紙袖珍題詠集末若葉韻塞有磯海
笈日記薦獅子集俳諧温故集ひつ千鳥炭俵〕

第五項 批評

許六

桃隣は花實未だしかとせず然れども桃隣人間に生れたれば花實あるとは見えたり、

白桃や雨も落ちず水の色

と言へる句侍れば強て修行の功を積まばあらはるべし、この人常に貧賤にして勞せらるゝ朝夕自己の取りはやしによつて、籠を賑はせり、風雅もかくの如くと思へるによつて、算用十露盤の上にて、損益を考へ、長崎の行脚よりは松島に徳ありと思へるに似たり、この人には色々か

しき話多し、みちのおくに旅せむと言ひしは、春の頃なり、その春に晋子が句に、

饅頭で人を尋ねよ山櫻

といふ句せしに、この坊みちのくの饅別と心得て、松島の方へ赴きたるもおかし、戻りて後の今日は、饅別にてなきと知りたるや、彼に聞きたし、

〔俳諧問答〕

第二十章 野坡

第一項 傳記

畧傳

彌助志太氏越前商家ニ生レ江戸ニ居ス、云々〔俳家奇人談に、初め江戸に遊び、後浪花に住す、樗木社と號す、三井番頭也ト云、老後西海日向ニテ死ス、野翁ト云、老後先師ノ無名庵ヲ高津野ニ移、高津ノ翁ト號ス、元文五年正月三日、七十八歳、〔蕉門諸生全傳〕

第二項 性格



野 坡 像

或夜盜其家に忍入りたり、坡相對していはく、我一物の貯なし、唯茶一斤調へ置けり、今夜寒ければ柴折焚きて快く寛語すべしと、盗うなづきながら此處彼處うちながめつゝ、机上に草庵の魚火を逸出ると端書して、我庵の櫻も寂し煙先とあるを見つけ、何の火事にやと問ふ、坡しかくくのよし答ふ、左あらば今目前の有様も句作なるべきやと、坡すなはち垣潜る雀ならず雪の跡と、盗大に感じて出で行きけり、(俳家奇人談)

(芭蕉堂所在三十六人肖像中仙流畫)

第三項 著 書
自 著

「炭俵」

無頓着

芭蕉著書の條を見よ、

「野坡傳書」

杉風傳書とともに、兩傳書として寫本にて傳はれり、俳諧の口傳を記したるもの、後に「野坡別傳」てふを添へたり、

後人の編述

「雅文せうそこ」

許六の條を見よ、

第四項 作 品

連 句

梅が香にのつと日の出る山路哉

ところぐくに雉子の啼きたつ

家普請を春の手透に取付て

かみの便りにあがる米の直

雪のうちばらぐくとせし月の雲

第二十章 野坡

芭 野 野

蕉 坡 坡 蕉

第二十章 野坡

藪をし咄す秋のさびしき
 ヲ御頭へ菊もらはるゝめいわくさ
 娘をかたう人に逢はせぬ
 奈良通ひおなじつらなる細元手
 ことしは雨の降らぬ六月
 預けたる味増取にやる向河岸
 ひたといひ出すお袋の事
 夜もすから尼の持病をおさへける
 菊蕪ばかり殘る名月
 初雁に乘かけ下地敷て見る
 露を相人に居合一ぬき
 町衆のづらりと酔うて花の蔭
 門で押さるゝ壬生の念佛
 二才東風かせに糞のいきれを吹廻し

野 野 野 野 野 野 野 野
 坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡

たゞ居る儘に眩わづらふ
 江戸の左右向ひの亭主上られて
 こちらにもいれどから白をかす
 方々に十夜のうちの鐘の音
 桐の木高く月さゆるなり
 門しめてだまつて寝たる面白さ
 拾うた金で表がへする
 初午に女房の親子振舞うて
 まだこの春も濟まぬ浪人
 法印の湯治を送る花盛
 繩手を下りて青麥の出来
 ニッとの家も東の方に窓を明け
 魚にくひあく濱の雑炊
 千鳥啼一夜々々に寒うなり

野 野 野 野 野 野 野 野
 坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡 坡

未進の高のはてぬ算用
隣へも知らさず嫁を連れて来て
屏風の際に見ゆる菓子盆

野 坡 蕉
(炭俵)

發句

春

長松が親の名で来る御慶かな
若水や冬は薬にむすびしを
春たつや捨てしは捨てし世に出たり
ほのくくと烏黒むや窓の春
みなくくに咲そるはねと梅の花
ふり袖のちらと見えけり闇の梅
鶯や門はたまくと豆腐賣
鶯や雀さやく聲の間

鶯やきのふの藪は風ばかり
猫の戀初手から啼いて哀なり
初午や鍵をくはへて御戸開

送別

雲霞何處迄行くも同じ事
法度場の垣より内は董かな
春風にむかふ椿のしめり哉
はき掃除してから椿散りにけり
五人扶持取りてしだるゝ柳かな
ほんのりと日の當りたる柳かな
山越て近づき顔や初ざくら
見上ればまだ日の残る柳かな
百筋も春の道あり糸ざくら
食の時皆集るや山櫻

祭まで遊ぶ日なくて花見かな
日半路をてられて来るや桃の花
苗代や仁王のやうな足の跡
静にはなかれぬ雉子の調子かな

夏

五月雨に小鮒をにぎる子供かな
五月雨にぬれてや赤き花柘榴
手まはしに朝の間涼し夏念佛
夕涼あふなき石にのぼりけり
このあたり二三度戻る涼かな
麥の穂に来るや雀の夫婦連
麥の穂や出抜けても猶麥の中
行雲を寝て居て見るや夏座敷
さじきまで届かぬ夏の木陰かな

杜宇鳴く夜は空をひくめたる
子規顔の出されぬ格子かな
つゝまれて水ものびたる蓮かな

秋

難波津や蘆の葉に置く天の川
魂祭皆若い衆につかはるゝ
盆の月寝たかと門を叩きけり
朝顔の入相なれや粥の鐘
落る日も名月なれや松の空
三尺の松風寒し後の月
岡崎は祭りも過ぎぬ葉鶏頭
石臺を終にねこぎや唐がらし
藏かくす亭主の佗や竹の菰
草花や茶人落付水の冷

山伏の切火をちらす花野かな
 草莖に鴉の心は知られけり
 八朔や桂の鯉の羽織禮
 菊の香も日の短かさに月夜かな
 忠度と名のりもあえぬかゝし哉
 旅に居る爺の袷を砧かな
 母の目のあかぬ程うつ砧かな
 日は西に雨の梢や渡り鳥
 初雁に闇の目當の彦の山

深川書讀

ばせを葉は野分してあり庵の留主
 秋もやゝ雁下りそろふ寒さ哉
 遊ぶなら酒ふるまはん秋の暮

冬

この頃の垣の結目や初時雨
 小夜時雨隣の白は挽きやみぬ
 足くせになるや時雨の里廻り
 竹に來て猶足早き時雨哉
 押あうて宿はものくふしぐれ哉
 時雨うと思うて咲くやびはの花
 初霜や衾にこもる鐘のこゑ
 正客の行儀くづさぬ寒かな
 人聲の夜半を過る寒さ哉
 初雪や塀直さむといひくらし
 初雪に隣を顔で教へけり
 力なや膝を抱へて冬籠
 ともし火も動かで丸し冬こもり
 水仙や庵の會釋に伐へらし

鉢巻を取れば若衆ぞ大根引
 えり屑を給はり候へとしの梅
 投節のその次通る鉢たゞき
 餅つきや元服さする草履取
 はしりまふ人に紛れよ年のくれ
 年の暮互にすでき鏡づかひ

(袖珍題詠集、七部集、俳諧近古類題集、菊の香芭蕉袖草紙、蕉門
 十哲集、有磯海、晝寢隨筆、むつ千鳥韻塞)

文章

蕃椒序

とうがらしの名を南蠻がらしといへるは、彼が治世、南蠻にて久しか
 りし故にや未詳、酸醬子、天覗き、空見、八なり、等いへるは、おのが形を好め
 る人々の翫びて付けたるなるべし、皆やさしからぬ名目は、汝が生得の
 不束なれば、天資自然の理、さらく、怨むべからず、彼が愛を受くるや、石

臺にのせられて竹椽の端の方にあるは上々の仕合なり、ともすれば楯
 鉢のわれ、底ぬけ釣瓶に培れて、屋根のはづれ、二階のつま、物干の日陰を
 たのめる等危く見え侍るを、朝貌のはかなき類には誰もく、思はず、大
 方はかづら髭つり、髭の益荒雄にかしづかれて、貧乏樽の口をうつすみ
 さかなとなり、不食無菜の時、不圖取出され、多くは奴豆腐の頃、紅葉の色
 を見するを、榮花の最上とせり、かくはいへど、或人北野詣の歸るさに、道
 の邊の小童に黄金一兩くれて、汝が青々と一つ實りしを所望せし事あ
 りといへば、卑しめらるべきにもあらず、如かじ、今は其人々もこの世を
 さりつれば、恋愛をも頼むべからず、辛き目は見すべからずと、小序をし
 かいふ、

石臺を終に根こぎや蕃椒

(風俗文選)

第五項 言論

學文と俳諧

學文なき俳諧は上々箱入の俳諧、學文ある俳諧は釘とめの俳諧なり
と野坡はいはれたり、(俳諧磯の波)

不易流行

嫂の溺るゝ時手を取て助くるは流行なり、不易の理を守る時は嫂の
溺死ぬる事速なり、然れば不易も害となり侍る、また流行にのみ目を付
けたる風雅は其時は興も有なんながら、後はいひ出すべくもなし、

(蕉門俳諧語録)

配合

寒き物に寒き事を合せるは俳諧の力のなきなり、又淋しき物に凜し
き事を取合せ侍ることは俳諧の手がゝり有るものなり、この二つを踏
み破りて自由體に至る修行あるべし、(蕉門俳諧語録)

句

下の七五に發句調ひ申す句は、五文字に分きて骨折る事にして、五文
字を置きて發句になる事なり、(蕉門俳諧語録)

句はしまりを第一にして、新しみを願ひ申事に候、取合せものを尊し
とは存せず候、取合せなくて一物に仕立候句は、骨折れ初心の及ばぬ所
に候、(雅文せうそ、許六にかくる書)

第六項 批評

許六

野坡、利牛、孤屋、その中に野坡すぐれたり、舊染の汚れを、炭俵にあらた
め、流行の輕き一筋を得たり、然れども、元來三人ともに越後屋が手代な
れば、胸中狭きものどもにて、たとへば淺草川に舟逍遙する人の如し、陸
地より見る人、起臥自由に樂しめると思へども、船より外は動く事難し、
されば上野淺草の遊興を知らざるに似たり、師の恩によつて、炭俵の撰
者の號を蒙り名を顯せり、(俳諧問答)

滄浪居主人

(左は野坡が許六にかくりし俳論の書簡の評なり)

余常に思へらく、蕉門高名の中に、野坡は學問ありとも見え、又俳才

も働かずして、外の人々より餘程下なり、しかも長壽、元文の頃まで存生にて、其時分の句々は、蕉翁在世の比の句とは、遙に悉く覺ゆ、淡々が或人に向ひて、野坡は下手なれども老人なれば、尋ねもせられよかしと云けむ、實にもと、然るに今此問答を見れば、十に八九野坡に理ありて、風雅の意をよく心得たり、中にも、取合にも一物にも、達道の人には此難なし云々、此等は、的中の詞なり、(雅文せうそこ)

第二十一章 荷 芬

第一項 傳 記

畧 傳

山本荷芬(俳林小傳に稱山本武右衛門)は尾張名古屋桑名町に住めり、榎木堂と號す、蕉門の名士なり、云々、然るに晚年師翁の勘氣を蒙りしは、橋守といふ書を作れるより起れり、云々、(續俳家奇人談)

第二項 性 格

慈 悲

ある人四時の景物なりとて水鶏と鶉とを不食、不圖其心を感じて我も雁を食はず、

(曠野)

雁くはぬ心佛にならぬぞ

第三項 著 書

自 著

曠野

芭蕉の條下を見よ、

第四項 作 品

連 句

郭公待たぬ心の折もあり

雨の若葉に立てる戸の口

引捨てし車は琵琶のかたぎにて

あらさがなくも人のからかひ

荷 芬

野 水

水 水

荷 芬

第二十一章 荷 兮

月の秋旅のしたさに出るなり
 一荷になひし露のきくらげ
 初嵐はつせの寮の坊主共
 菜畑ふむなと呼ばりかけたり
 土肥を夕々にかきよせて
 印判落す袖ぞ物うき
 通路のついでに逃げたり
 六位にありし戀のうはきさ
 代参りたゞやすくと請おひて
 錢一貫に鯉一節
 月の朝鶯つげに急ぐらむ
 花咲きけりと心まめなり
 天仙蓼に冷食あさし春の暮
 かけがねかけよ看經の中

四四〇

荷 荷 荷 荷 荷 荷 荷 荷
 水 兮 兮 水 水 兮 兮 水 水 兮 兮 水 水 兮

たゞ人となりて着物うらはふり
 夕せはしき酒ついてやる
 駒の宿昨日は信濃今日は甲斐
 秋の嵐に昔淨瑠璃
 めでたくも呼ばれにけらし生身魂
 八日の月のすきと入るまで
 山の端に松と樅とのかすかなる
 きつき煙草にくらくとす
 暑き日や腹掛ばかり引結び
 太鼓たゞきに階子のぼるか
 こらくと寝たる木賃の草枕
 氣だてのよきと聲にほしがる
 忍ぶとも知らぬ顔にて一二年
 庇をつけて住居かはりぬ

第二十一章 荷 兮

四四一

荷 荷 荷 荷 荷 荷 荷 荷
 兮 水 水 兮 水 兮 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水

三方の數むつかしと火にくぶる
供奉の草鞋を谷へはき込み

段々や小鹽大原嵯峨の花

人おひに行く春の川岸

(あらの)

(なほ芭蕉連句の條を見よ)

發 句

春

供屠蘇白散

いわけなや屠蘇なめ初る人次第

萬才の宿を隣にあけにけり

白魚の骨や式部が大江山

また見るや一重の後の梅の花

しんくくと梅散りかゝる庭火哉

曉の釣瓶にあがる椿かな

春めくや人様々の伊勢参り

先明て野の未低き霞かな

のとけしや港の晝の生肴

朝日二分柳の動く匂かな

忙しき野鍛冶を知らぬ柳かな

はつきりと有明残る櫻かな

石清水臨時祭

沓音も静にかざす櫻かな

連立つや従弟はをかし花の時

首出して岡の花見よ蛇とり

嵯峨までは見事歩みぬ花盛

ねふたしと馬には乗らぬすみれ草

春日祭

年毎に鳥居の藤のつぼみ哉
山まゆに花咲かぬる踟躕かな

夏

露にたぐ香もあるべし衣更へ
五月雨や夕食くうて立出る
はき庭の砂あつからぬ曇かな
簾して涼しや宿の這入口
あやめふく軒さへよそのついで哉
菖蒲入る湯を貰ひけり一盥

灌佛

けふの日や序に洗ふ佛達

端午

面瘦せて葵付けたる髪うすし
うちあけて施す米ぞ蟲くさき

蝙蝠に亂るゝ月の柳かな
河原まで瘡まぎれに御後かな
鶉のつらに簾こぼれてあはれなり
麥ぬかに餅屋の店の別かな
蓮池の深さ忘るゝ浮葉かな
あだ花の小瓜と見ゆるちぎり哉

十如是

思ふこと流れて通る清水かな

松坂の浮瓢といふ人のみまかりたるにいひやりける
橘の香り顔見ぬばかりなり

秋

おどろくや門もてありく施餓鬼棚
唐黍のかげを渡るや露しぐれ

閑居増戀

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな
 秋のくれいよく軽くなる身かな
 鹽魚の齒にはさかふや秋の暮
 稻妻に大佛拜む野中かな
 鳶の葉や残らず動く秋の風
 狩野桶に鹿をなづけよ秋の山
 家買て今年見初る月夜かな
 いつの月もあとを忘れて哀なり
 朔日
 暮いかに月の氣のなし海の果
 二日
 見る人もたしなき月のゆふべ哉
 更科の月は二人に見られけり
 ひつかしと月を見る日は火も焼かじ

爪髪も旅の姿や駒迎
 朝顔を其子にやるな食ふもの
 中たるみして朝顔の盛り哉
 朝顔の白きは露も見えぬなり
 つれなしと家主やくれし女郎花
 もえきれて紙燭をなぐる薄かな
 かるかやの物にさはらぬ戦ぎ哉
 待戀
 來ぬ殿を唐黍高し見おるさん
 草の葉や足の折れたる蟋蟀

冬
 十月更衣
 玉しきの衣かへよと歸り花
 見知りあふ人の宿りの時雨かな

第二十一章 荷兮

四四八

木枯に二日の月の吹き散るか

ちらくや淡雪かゝる酒強飯

曙や伽藍伽藍の雪見舞

陽炎や取つきかぬる雪の上

隠士にかりなる室を設けて

新しき茶袋一つ冬ごもり

其角に別るゝ時

あゝたつた獨りたつたり冬の宿

いく落葉それ程袖も綻びず

あはれなる落葉に焼や鳥さより

五節

舞姫にいく度指を折りにけり

追儼

おはれてや脇にはづるゝ鬼の面

年の暮杵の實一つころくと

(袖珍題詠集俳諧近古類題集芭蕉袖草紙七部集錦緞綴卯辰集)

第五項 批評

許六

荷兮、分別知れず、愚にかへりたるといふべきものか、(俳諧問答)

第二十二章 曾良

第一項 傳記

畧傳

河合氏稱惣五郎信濃諏訪人從蕉翁下陸奥途にして薙髮奥の細道に、惣五を改めて宗悟とす時、有黒髮山之句、寶永六年己丑年十月二十二日、壹岐國松本にて終る蕉翁の高足たり、(俳林小傳)

第二十二章 曾良

四四九



曾良像

(芭蕉堂所在三十六人肖像中一形也)

花咲て七日鶴見る籠かな
懼て蛙のわたる細橋
足踏木を春又氷る後して
米一升をはかる關の戸
名月を隣は寝たる草枕
枝見苦しき桐の葉をかる

境遇の變移

曾良は木曾福島士云々、後浪人して
甲州に住み、芭蕉に逢て朝夕膝をなら
ぶ、(俳人百家選)
東武翁ト隣ル、薪水ヲ助ク、云々、劍術
指南ス、(蕉門諸生全傳)

第二項 作品

連句

芭蕉 清風 舉白 曾良 其角
芭蕉 清風 舉白 曾良 其角

墨衣はらへば虫の殻落ちて
内外の下向靜なりけり
既に立つ討手の使いかめしき
一夜のちぎり錢かづけたる
松明に顔見むといふ君は誰
生て捨子の水にながるゝ
影形知れぬ敵を世に歎き
今年の餅をおもふ山寺
雪をもつ樗や櫻に露見えて
虹のはじめは日も匂なき
しづみては温泉をさます月すし
三つ行鹿のひとつ矢を負ふ
ニオ勢々と軍に氣ある朝芒
男ながらの白粉をぬる

第二十二章 曾良

曾良 風角 曾良 風角 曾良 風角

風 白 蕉 角 齋 良 風 角 蕉 良 白 風

第二十二章 會 頁

藤琴に明の風雅を忘れざる

涙折々牡丹散りつゝ

耳うとく妹が告げたる子規

つれなき美濃に茶屋をして居る

札焼て刀斗は傳へけり

我うつ鷹を殿の御拳

檜紅葉狂歌やさしく詠そへて

京の月夜は暎踊るらん

物となく物やむ人の獨り寝に

眉ぬぐ袖の翠簾にうつぶき

ニッ唐の書よめぬ所をうちやりて

火ともし買に雪の山道

あはれさは筈屋に捨てし破れ網

何やらなくて鹽やかぬ浦

四五二

會

角 白 蕉 良 風 角 齋 雪 白 蕉 良 齋 風 蕉

會

角 白

會

頁

相國の植玉ひけん花と松

車をおりて春のやすらひ

(ニッ橋) (なほ北枝連句の條下を見よ)

發 句

春

春の夜はたれか初瀬の堂籠

衣裳して梅あらたむる句かな

柴部屋を北の隣に梅の花

病僧の庭掃く梅の盛り哉

鶯や上毛しをれて雨上り

大峯やよしの、奥の花の果

置飼する人は古代の姿かな

夏

卯の花をかざしに關の晴着かな

第二十二章 會 頁

四五三

卯花に兼房みゆる白毛かな
 動きなき岩撫子や星の床
 松島や鶴に身をかれほととぎす
 しら濱や何を木陰に郭公
 波こえぬ契ありてやみさこの巢
 月銚や兒の額の薄粧
 象潟や料理何くふ神祭

秋

よもすから秋風きくやうらの山
 苦しさも茶にはかつえぬ盆の旅
 向の能き宿も月見る契かな
 雨にねて竹起きかへる月見かな
 行きくたふれ臥すとも萩の原
 何魚のかざしに置かむ菊の枝

破垣やわざと鹿子のかよひ道

冬

なつかしや奈良の隣の一時雨
 畳めは我が手のあとぞ紙衾
 浦風や巴をくづすむら衛
 ひつかしき拍子も見えず里神樂
 こねかへす道も師走の市の様

(七部集、芭蕉袖草紙、韻塞、奥の細道、薦獅子集、卯辰集、市の庵)

第二十三章 土 芳

第一項 傳 記

畧 傳

服部半左衛門保英、始ハ蘆馬ト云、猿蟲庵ト號ス、後ニ些中庵ト改ム、享
 保十五年庚戌年正月十八日卒、長田庄西蓮寺ニ葬、(蕉門諸生全傳)



土 芳 像

三冊子

第二項 著 書
後人の編述

四五六

白双紙、赤双紙、黒双紙を合したるもの、三篇とも土芳が随聞記にて、芭蕉の言、蕉風の真趣を見るに宜し、關更の編なり、安永五年の序あり、

第三項 作 品

連 句

種芋や花の盛を賣歩行

炬燵ふさげば風かはるなり

酒好のかしらも結す春くれて

ぬぎかへがたき草の衣手

有明の七つ起なる藥院に

芭 蕉
半 殘
土 芳
良 品
殘 品

ひさごの札を付わたしけり

ウ秋風に楫の戸こちる膝入れて

小僧のくせに口答へする

やすくと矢洲の河原の歩行渡り

多賀の杓子もいつのことふる

手枕の男も持たで三輪組

人にとりつく愛名口惜し

萱草の色もかはらぬ戀をして

秋立つ蟬の啼死にけり

月ぐれて石屋根まぐる風の音

こぼれて青き藍瓶の露

露の花の手際に咲そめて

腹の鳴くる水のかはりめ

ニオ猫の眼の六つ柿核に四つ圓く

第二十三章 土 芳

芭 蕉
土 芳
半 殘
土 芳
良 品
殘 品
芭 蕉
土 芳
半 殘
土 芳
良 品
殘 品
芭 蕉
土 芳
半 殘
土 芳
良 品
殘 品
芭 蕉
土 芳
半 殘
土 芳
良 品
殘 品

四五七

第二十三章 土 芳

四八五

あすのもよひの織羅苜を切る
 から臼も病人あればかさぬ也
 たゞさゝやいて出る髪ゆひ
 とりくくに紺屋の形を取ちらし
 冬至の宴に物思ひます
 化粧とも粧へども君かへり見す
 また元服のあとなかりける
 朝夕に嫌の多き膳まはり
 いとあはれなる野の宮の衆
 田鼠の稻くひあらす月澄て
 風冷えそむる牛の子の旅
 ニッ露時雨越のさき織袖もなし
 死なすば人の何になるべき
 神風や吹起されてかい覺ぬ

土 土 土 土 土 土 土 土

品 蕉 殘 品 芳 殘 蕉 芳 品 蕉 殘 品

筆を落せば鳥啼出す
 しらくとひとへの花にさし向ひ
 長閑き晝の大鼓打ちけり

土

(己が光)

品 芳 殘

發句 春

水仙に来るもの一重年の明
 瓜切らむ若菜の汁のうす緑
 かげろふやほろく落る岸の砂
 梅が香や砂利しき流す谷の奥
 梅散るや糸の光の日の匂
 鶯のなきあつめたるこてふ哉
 鶯に底のぬけたる心かな
 荷鞍ふむ春のすゝめや椽の先

第二十三章 土 芳

四五九

草餅に異な振舞や鮓汁
鮎の子の心すさまじ瀧の音
黒ぼこの松の育ちや若緑

夏

卯の花の葉は持ちながら笹の垣
鶯に橋見する羽ふき哉
鳴止みに鶯はいる茂りかな
砂川をわたりにて遊ぶ涼かな
蚊屋を出てもう一度涼む戸口かな
職人の帷子着たる夕涼

秋

明ぼのや稻妻戻る雲の端
あの雲に宵はとられてけふの月
おもしろう松笠もえよ薄月夜

しはくくと寒を月の光かな
おくれじと木槿の花の亂れ咲
柳ちる下やじろりと蛙の目
霧降りや麓のつゆは蔓珠沙花
とり落す音を誰する瓢かな
この比のおもはるゝ哉稻の秋
雁鳴て目をあく菊の苔かな
近江路やすがひに立てる鹿の長

冬

植竹に川風寒し道の端
棹鹿のかさなり臥る枯野かな
冬梅の一つ二つや鳥の聲
漸に寢所出来ぬ年の内

(俳諧近古類題集、七部集、韻寒、小文庫、有磯海、續有磯海、笈日記)

第四項 言論

誠の俳諧

夫俳諧と云事は代々利口のみに戯れて先達終に誠を知らず、中頃難波の梅翁自由體をなして世に弘むと雖、詞のみにかしこくて誠を知らず、然るに亡師芭蕉翁此道に出て三十餘年、俳諧始めて實を得たり、師の俳諧は名は昔の名にして昔の俳諧に非ず、誠の俳諧なり、

(蕉門俳諧語録)

不易流行

師の風雅に萬代不易あり一時の變化あり此二に極まり其本一なり、其一といふは風雅の誠なり、不易を知らざれば實に知れるに非ず、不易といふは新古によらず、變化流行にもかゝはらず、誠によく立たる姿なり、代々の歌人の歌を見るに代々其變化あり又新古にもわたらず、今見る所昔見しに變らずあはれなる歌多し、是まづ不易と心得べし、又千變萬化するものは自然の理なり、變化にうつらざれば花あらたならず、是

におしうつらずといふは一旦の流行に口實を得たるばかりにて其誠をせめざる故なり、せめず心を凝らざるもの誠の變化を知るといふことなし、只今にあやまりて行くのみなり、せむるものは其地に足をすゑ難し、一步自然に進む理なり、行末幾千變萬化するとも誠の變化は皆師の俳諧なり、假りにも古人の涎をなむることなかれ、四時のおしうつるとて物あらたむるに皆かくの如しともいへり、(赤草紙)

物と我

松の事は松にならへ竹の事は竹にならへと師の言葉ありしも私意を離れよといふ事なり、此習といふところを己が儘に取て終に習はざるなり、習へといふは物に入て其微のあらはれて情感するなり、句となるところなり、たとへ物あらはに言ひ出でても其物より自然に出る情に非れば物と我二つになりて其情誠に至らず、私意の作意なり、

(赤草紙)

發句

發句は行きて歸る心の味なり、たとへば、

山里は萬歳遅し梅の花

といふ類なり、山里は萬歳遅しと云放して、梅の咲けりと云心の如くに、
行きて歸るの心、發句なり、萬歳遅しとばかりは平句の位なり、
(蕉門俳諧語録)

第二十四章 嵐蘭

第一項 傳記

畧傳



(芭蕉堂所在三十六人肖像中)

嵐蘭像

松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間に遊ばしむ、予とちなむ事十とせ餘り九とせにや、この三とせばかり官を辭して(風俗文選に、業武奉仕板倉家而奉諫速辭官岩洞に先賢の跡をしたふと

雖、老母を荷ひ稚子をほだしとして未だ世波にたゞよふ(風俗文選に携母隠于武淺草)されども榮唇の間に居らず、日々風雲に座して今年仲の秋中の三日由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳く、其かへるさより心地なやましうして終に息絶えぬ(俳人百家撰俳林小傳に、元祿六年八月二十七日歿)(二葉集嵐蘭誄の一節)

第二項 著書

自著

「罌粟合」

蕉門の人の罌粟の句合十三番に判を加へしもの、元祿五年編嵐蘭の自序あり

第三項 作品

連句

初茸やまだ日數へぬ秋の露

青きすゝきにこもる谷川

第二十四章 嵐蘭

芭蕉
俗水

野分より居樹の替地定りて

さし込月に藍瓶の蓋

鹽付て餅くふ程の草枕

なで、怖がる草の引はた

ウ年寄は土持ゆるす夕まぐれ

諏訪の落湯に洗ふ馬の背

辨當の菜をたゞ置く石の上

やさしき色に咲る撫子

四ツ折のふとんに君が丸く寝て

物書中につらき足音

月くれて雨の降やむ星明り

早稻の俵にほめく刈豆

胸蟲にまた起さるゝ秋の風

糸に赤子をゆする小坊主

史 半 嵐

邦 落 蘭 蕉 水 邦 落 蘭 蕉 水 邦 落 蘭 蕉 水 邦

花鳥の家と見えたる土手の下

細き井溝をのぼる若鮎

ニオ春風に太鼓聞ゆる旅芝居

のみ口ならず伊丹諸白

琉球に野良疊の表がへ

是非此際はあけん物役

見知られて近付なりし木曾の馬士

嫁入するよりはや鳴子ひく

袖ぬらす染帷子の盆過て

月もわびしき醬油の粕

草赤き百石どりの門構へ

公事にまけたる奈良の坊方

傘をひろげもあへず俄雨

見る目も黒し牛の日覆

嵐

落 蕉 蘭 水 蕉 邦 落 蕉 蘭 水 蕉 邦 落 蕉 蘭 水 蕉 邦

ニッ出店へと又も隠居の出でられて

干物つきやる精進の朝

手拭のまぎれて夫を言募り

駄荷をかきこむ板敷の上

人つゞく毛利細川の花盛

聲も賢なり雉の勢

嵐

落 水 蕉 蘭 邦 落

(十六夜集) (なほ洒堂連句の條下を見よ)

發 句

春

春を何と風のでまめ時雨の海老

若菜つまむ三浦の大助百六つ

はつ市や雪に漕來る若菜船

夢さつて又一句ひ宵の梅

道灌や花はその代を嵐哉

心得ぬ花見のつらや相撲取

食ひ物に食ひ入る奴も花見かな

編笠刀うき世つたふか花見猿

梨花更に柿の葉に蝶すだくらむ

夏

商陸の葉はふとりけり五月雨

白雨や蓮一枚の捨あたま

水無月や朝めしくはぬ夕すゝみ

扶持方をつゞくや市の郭公

郭公春朴の葉に隠れしや

子やなかん其子の母も蚊の喰

夕顔や裸で起きて夜半過

しら芥子にはかなや蝶の鼠色

青くさき匂もゆかしけしの花

燕子にふんどし干すや川あかり
澤瀉をうなぎの濁す澤邊哉

秋

四十はや朝顔の葉のいそがしや
笑にも泣にもにぎる木槿かな
胡芋千宿よ夕顔の夕さもあらばあれ
織女に老の花ある尾花哉
死なば爰秕穂に出る小田の霜
もぎのこす茄子はいづら菊の園

冬

小夜時雨隣へはひる傘の音
百舌鳥の居る野中の杭よ神無月
餅つきやあがりかねたる鶏のとや
煤はきに碯すさまし雪の上

(七部集、末若葉雜談集、韻塞、其袋、有磯海、小文庫、市の庵、春と秋、
むつ千鳥)

文章

蚊蚊辭

蚊蚊帳中の蚊、汝を焼くに辭を以てす、汝この辭を聞く時は、わが手に
死すとも自ら足れりとせよ、夫澤雉は樊中に養はれむことを願はずと、
彼は心をとる、これを食を求めて人の肌に迫る、彼を愛せむや此を憎ま
むや、

雉子は草にかくれて草の爲めに焼かる、汝は帳に入て帳の爲めに焼
かるあはれなる哉、いづれとかせむや、

蝉促織の火に入るは戀故と聞けばわりなしや、雨に濡れ露にそぼち
て、誘はれし風だにもつらし、實に玉の緒の絶えなむ事も知らず、いく偽
の夜や頼み來し、汝がやかるゝ事何を情とせむ、義經の逆落は暫くさし
かく、須山小宮山が夜討は、かくれて謀をなすと雖、天下の爲にして名自

ら従ふ、又汝といはむや、

虞舜は頌父をさけ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ、共に天にして、汝といふべきにあらず、大盗豈に樞戸を穿たむや、汝がふるまふを見るに、帳をたるゝ時は、其翻々の間をうかゞひ、垂終つて縦横の透間をたづね、すべて小破の所をもとめ、人のしりへにつきて、入らむとはかる、嗚呼、跣躑が徒にはあらじ、

すべて汝が行ふ處、猛き事もなく、樂む事もなし、あはれなる方にもやさしき方にも非ず、たゞ憎むべきものゝ甚しき也、

蚊蚊帳中の蚊、汝をやくに辭を以てす、汝この言葉をきく時は、我手に死すとも自ら足れりとせよ、

子やなかむその子の母も蚊の食はむ

(風俗文選)

第二十五章 露川

第一項 傳記

略傳

露川坊は伊賀の人、蕉門諸生全傳に、伊賀國伊賀郡鷹山村の産常に尾の名護屋に住めり、俳林小傳に住尾張名古屋本町、稱藤屋市郎右衛門、蕉門の古老なり、時人云て金城に北枝あり、護城に露川ありと稱したりとかや、云々、師翁歿して後、私説をかまへ、異風を唱ふ、濃の支考これを駁して送れる文あり、名づけて露川責といふ、川また返答の書を作つて其嘲を解く、是を名づけ



露川像

(芭蕉堂所在三十六人肖像中密湖畫) 合楔と號す、(俳家奇人談)

第二項 作品

連句

水鶏なくと人のいへばや佐屋泊

第二十五章 露川

芭蕉

苗の平を舟へ投げ込む
 朝風に向ふ合羽を吹たてゝ
 追手のうちへ走る生もの
 さかやきも暖簾せりあふ月の秋
 くづれてわたる椋鳥の聲
 ウ耕作のことをよく知る初嵐
 豆腐あぢなき信濃街道
 尻敷のへりとり塵もしき破り
 雨の降日を書付にけり
 炮祿の繻にくるしむ蠅の足
 苗を刈あげて門でひろぐる
 きり麥であちらこちらへ呼ばれ合ふ
 御旅の宮のあさき霄道
 うそ寒き言葉の針に待ぼうけ

四七四

露 素 露 露 露 露
 川 蕉 川 蕉 川 蕉 川 蕉 川 蕉

袖にかなぐる前髪の露
 咲花に二腰はさむ無足人
 打開いたるけんけしま畑
 ニオ山かすみ鉢の脚場を見下して
 船の自由は半日に行
 月夜にて物事しよき盆の際
 かりもぎ時の瓜を漬こむ
 三鉦の念佛にうつる秋の風
 使をよせて門にたゝすむ
 我戀はあうて笠とる山もなし
 手越の夜のことにならね
 さては下戸いちごの様になりにけり
 達者自慢の先にたゝれた
 金剛が一世の時の花ざかり

第二十五章 露川

四七五

露 露 露
 支 左 巴 露
 蕉 川 覽 考 次 丈 川 覽 考 次 丈 川 覽 考
 蕉 川 覽 考 次 丈 川 覽 考 次 丈 川 覽 考

つゝに木瓜の照りわたる影
ニウ春の野のやたらに廣き向河岸

三俵つけて馬の鈴音

それ／＼に男女も臺をろへ

よめらぬ先に娘參宮

有明に百度もかはる秋の空

疊も匂ふ棚の松茸

發句

春

正月を洗ひ流して茶漬哉

藪入の跡やその儘馬の留守

人中を匂ひありくや市の梅

鶯も見られに出たか下馬の松

(發日記)

丈次考覽川丈次

鶯の空輪ながき初音哉

鶯の尻聲引いて木魂かな

正月はまだ煤くさし猫の戀

花に寝ていかなる事を鳥の夢

くたびれぬ顔に花散る婢子かな

其日には覗とよかぬ木の芽かな

汝みちて上野の方や舞雲雀

田にし取いかに瘦たぞ鶯の足

木曾殿もかくや汚れて田かき馬

夏

鶯はなげと卯月の別かな

高砂の脇いたさばや更衣

麥からの笛や布袋の夕涼み

山門を雲の出引や夏の山

草木も人も夢見ん夏座敷
五月雨やだまつて通る杜宇
郭公夜や明残る藪のうら
ほととぎす雲踏はづしく

郭公なくや静に豈の塔

蚊の聲にはいりかねたる湯殿かな

秋

名月に橋の往來や影まはし
分別をはなれて海の月夜かな
柿色に枯野めかすや花すゝき
とか雨に算を亂すや山すゝき
くどからぬ花や野菊に残る月
草刈の道々こぼす野菊かな
夜あらしを合む桔梗のつぼみ哉

買うて行く塗長持や稻の花
あみ栗やむかふ齒そつて猿まなこ
早稻荳や隣の田には二番草
出揃ふや稻の田づらのさんさ降り
乗下につけて露うくすいき哉
鳴鳴て花表のおくは何もなし
人の心驚はなつあり魚放つ
四五日も出て待冬や峰の雲

冬

奥底もなくて冬木の梢かな
居風呂に肩もかくれず冬の月
三日月の眉細めたり峰の雪
錢買がさし切らしたる雪の道
ほたの火やあたゝかになしきりくす

名聞を襟に残して紙子かな

水仙の霜や阿彌陀の爪弾き

〔俳諧近古類題集菊の香袖珍題詠集篇突東華集白陀羅尼笈

日記有磯海續有磯海千鳥掛一幅半俳諧温故集皮籠摺晝寢

隨筆夜話狂山彦集新故山川集

文 章

草 苳 説

松の葉かきは雪間のけしきありながらその親の貧しきより其子は
つゞれ着ておかしからず馬糞かく子のいかなれば親もなく兄弟もな
くいづこより出ていづこには歸るらむさゝ波や粟津の松の木の間か
けて馬の鈴音に風情は得たれど蛇のいふかひなき名なるべしこの草
苳は笛の名人さてこそ牛にも乗せておきたれ夏は朝かけの見てもい
と涼しく百合風車苳入れて絡緯のゐて鳴く日もあるべし秋はひら雨
のとりあへず道かきいそぎ荷ひつれたるに空また晴れて又おかし鈴

鹿はかゝるけしきありて坂は日の照る所なるべし

草苳の道々こぼす野菊かな

〔風俗文選〕

第三項 批評

許 六

露川師の國より出でたる人にて風雅の手筋もよし然れどもなし置
きたる功德も少し花實の姿確ならずたとへば廣野を夜行くが如し

〔俳諧問答〕

第二十六章 正 秀

第一項 傳 記

略 傳

水田氏稱利右衛門近江膳所藩中物頭曲翠が伯父なり享保八年癸卯
八月三日卒〔俳林小傳〕

第二項 作 品



正 秀 像

(芭蕉堂所在三十六人肖像中大虚真人寫)

連 句

晴道や苗代時の角大師 正秀
 明くればかすむ野鼠の顔 珍碩
 嘴太のわやくに鳴きし春の空 碩
 かまへをかしき門口の文字 正秀
 月影に利休の家を鼻にかけ 正秀
 度々芋を買はるゝなり 碩
 虫は皆つゞれくと鳴くやらむ 正秀
 片足くの水履尋ぬる 碩
 誓文を百もたてたる別路に 正
 涙ぐみけり供の侍 碩
 須磨はまた物不自由なる臺所 正
 狐の恐る弓かりにやる 碩
 月氷る師走の空の天の河 正
 秀 碩 秀 碩 秀 碩 正 碩 碩 碩 碩

無理に居ゑたる膳も進まず 碩
 いらぬとて大脇差もうちくれて 秀
 獨ある子も矮鶏に替へける 碩
 江戸酒を花咲く度に戀しがり 秀
 あひの山禪く春の入相 正
 雲雀鳴く里は馬屋肥かき散らし 碩
 火を吹いて居る禪門の祖父 正
 本堂はまだ荒壁のはしら組 碩
 羅綾の袂絞り給ひぬ 正
 齒を痛む人の姿を繪に書きて 碩
 薄雪たわむ薄瘦せたり 正
 藤垣の窓に紙燭を挟みかき 碩
 口上果てぬいに様の時宜 正
 尊げに小判数ふる草袴 碩
 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 正 碩 碩 碩 碩

第二十六章 正秀

四八四

秋入初る肥後の熊本

正

秀

幾日路も筈で月見る役者船

正

秀

素布子ひとつ夜寒なりけり

正

秀

澤山に兀めくと叱られて

正

秀

呼びありけども猫は歸らず

正

秀

子規御小人町の雨あがり

正

秀

八入の楓木の芽もえ立つ

正

秀

散る花に雪踏引きずる音ありて

正

秀

北野の馬場に燃ゆる陽炎

正

秀

發句

(ひさこ)

春

刀さす供もつれたし今朝の春

残る雪比良の谷々覚えけり

正

天水に息つく猫の戀心

笠の端や陽炎が賀の甘市

山彦や花の梢にひょき行く

なぐりても崩え立つ世話や春の草

早わらびや笠取山の柱賣

春の日や茶の木の中の小室節

夏

草苳の草にむさるゝ暑かな

實にもとは請て寢冷の暑かな

日の岡やこがれてあつき牛の舌

熨斗むくや磯菜涼しき鳥がまへ

黙禮にこまる涼や石の上

夕立の追ひ来るさきも野原かな

白雨や中戻りして蟬の聲

秀

第二十六章 正秀

四八五

月代に夢見て飛ぶか蟬の聲
 草も木も螢くさしや水の音
 月末にまはる螢のさかり哉
 青鷺や世間ながむる田植歌
 日の岡や茶山しに行く夫婦連
 猪に吹かへさるゝともしかな

秋

稻妻に座をわたしてや消ゆる虹
 藍壺をやゝ暖める夜寒かな
 釣針やなごり兼ねたる秋の風
 鳥差の素戻りをする野分哉
 待宵の月やむかひに出る雲
 酒買に船漕ぎもどす月見かな
 飛入の客に手を打つ月見かな

情出すや月の名をりをなくいと
 火の消えて胴にまよふか蟲の聲
 行燈を消して引込む夜寒かな
 澁糟やからすも喰はず荒島
 駒むかへ逢坂よりは行義なり
 こゝかしこ世に出がほのかし哉
 薪ともならでくちぬる案山子かな
 南大門たてこまれてや鹿の聲
 まさかりで柿むく柚が休かな
 松茸をあわてゝ取るや笠ばかり
 日あたりや蝨いろづく秋のくれ

冬

木枯にいつすがりてや雨蛙
 鍵持の猶振たつるしぐれ哉

いさかひに根もなき市の時雨かな
 さし足をわすれて閑の時雨哉
 朝霜や荷ひつれたる水煙
 それ鷹の鈴振りまはる爽かな
 猫鳥の山田にうつる寝かな
 脇指も我もさびけり冬籠
 騒しくならぬとり得や古紙子
 日の暮れてつなぐ笈に千鳥なく
 打こぼす小豆も市の師走哉

(袖珍題詠集、俳諧近古類題集、菊の香芭蕉袖草紙、草刈笛錦織
 綴、韻塞、有磯海、續有磯海、笈日記、東華集、白陀羅尼、薦獅子集、俳
 諧温、故集、山彦集、七部集)

文章

名二卷説

物にたよりにて性情を樂む事、専ら吟詠の道なり、其道またあまたなる
 中に俳道殊に柔にして情を寫し興を催すこと盡きず、此比崎江の卯七
 子渡鳥集を撰びて晝夜の二卷となしぬ、是を夜晝とかさねんや、將た晝
 夜と並べんや、たゞ渡鳥の年々行き廻り、己が初終を知らざるが如く、撰
 者の心もかく思ふなるべし、されば吳燕楚雁蜀魂仙鶴の、たま／＼有る
 が中に秋來る鳥の多く侍れば、其名を當季に定められて、實は春夏冬枯
 の畔にも猶たへざるものならんかし、(渡鳥集)

第三項 批評

許六

正秀が風雅、前の書に記す、是逸物なり、故に雜句のみ多くして、血脈の
 沙汰少し、自己の善惡分れず、他句もなほ知るまじ、別して當歲旦の三つ
 物、吐龍など組合たる俳諧三才の童子も笑ひ草とする事うるさし、その
 上歲旦の句、三句いたしたり、一句の外はせぬ事と師説に聞き置きぬ、

(俳諧問答)

第二十七章 琴風
第一項 傳記

略傳

琴風生玉氏は難波の人、何れの頃よりか、江戸へ來て蕉翁の門に遊ぶ、師歿して後晋子に従て學ぶといふ、女羅架と號す云々、當時琴風、百里と並べ稱せらる、老て故郷に歸り、病で死す、云々、俳人百家撰に、享保十二年二月七日終る、(俳家奇人談)

第二項 著書

自著

「俳諧瓜作」

同門の發句を選み、家は、「すさまじき物など、枕草紙風に分ちて擧げたるもの、大に趣味あり、琴風の句を見るにも便あり、本末二冊、元祿四年梓行、

第三項 作品

連句

身にとるや形も心も太郎月

隣あたりの梅かぎに出づ

糸遊に縫屋が軒や傳ふらむ

小便させぬ橋の上下

御用石苔のひすまで有明けて

秋を吟ずる藥園の蟬

膳の後書院に廻る角力取

長袖達に碁盤まゐらす

古の黄金を問へば竹流し

名のみなりけり美濃の傀儡

移香や虱を誘ふ戀もしつ

辨慶も泣く義經の運

盤算十符の菅菰あふ目なき

照降町に分る月雪

琴 扇

風 雪

琴

風

琴

風

琴

風

琴

風

琴

風

琴

風

第二十七章 琴風

四九二

俳諧の點者尋ぬる花心

琴

風

實に惜むべし野夫入の際

琴

雪

雉子うちて刃渡しの酒汲まむ

琴

風

取はやさるゝ身は寺の鐸

琴

雪

振鬮に役をあてたる夏祓

琴

雪

蒜食うた息かくすらむ

琴

風

たち君の歸所は玉造

琴

雪

契をするや髪おろす霄

琴

風

うつゝなの胸に手を置く夢のあや

琴

雪

眞鍮鏝を流石とやさす

琴

風

伊奈伊方那次野に出て朝の月

琴

雪

色づく草に活る青病み

琴

風

老の秋ととも柱も蒲穂にて

琴

雪

今日の嘶の果も弓筆

琴

風

人はいさ禪の眼に師走なし

供して舳の沓の番する

琴

雪

四ッ限りに燈しめす上屋敷

琴

風

若衆のうちを母にあづかる

琴

風

うちつけに密ぬ文の墨どこき

琴

風

十三里来て新らしき鯛

琴

雪

朝茶の湯それより花に誘ふらむ

琴

雪

ひと坪貰ふ春の庭芝

琴

風

(俳諧瓜作)

發句

春

筆初紙魚の巢作る笑かな

福壽草たゞにめてたき根ざし哉

身にとるや形も心も太郎月

第二十七章

風

四九三

第二十七章 琴風

奥表猫もこがれてあけにけり
闇の梅聖の胸もひらけり
鳥の眠り落ちたる柳かな

辭 世

一息にこの味ぞ春の水
猫の戀鼠もとらで哀なり
這ふ兒の目に先づかゝる董かな
俯や爪先さはる山櫻
花かさせあぐりが得たる水太鼓
石女に山吹見せて慰めむ
はね橋の釘に飛付く蛙かな
押へ手の指に粉のつく胡蝶かな
あな尊と僧都の留守に此の聲
枝川の心ばへある汝干かな

裸離いかに手足の支離なる

夏

一筆の墨繪に涼し峠の松
着せて見て我笠買はん門涼
白雨はいづちに霽れて瀧の音
皆人の目利しにくし夏衣
汗の香やあまにそぎたる兒の髪
うかれ女の白う出て行く蚊やり哉
竹の戸や鹿に着せたる蚊屋の端
蚊屋はこの庵のうちの庵かな
母も子も蠅打つ兒も寝入りけり
夏の中の産飯取に来る鳥かな
郭公蚊は初聲よりたゝかるゝ
子規色々文字のある事ぞ

から織や紋は大和の深見草
瓜作召されむ人の口はいさ
灌佛や涅槃に泣いた目を洗ふ
麻鷺なき世はかくぞ紙幟
祇園會や雑色達の棒の音
富士詣傾城の名も懺悔せむ

秋

朝顔に消盲きまじの顔しらくし
遠目鏡莊子が秋を見探さむ
草村に飯吹とるや秋の風
玉まつり片寄せて釣る紙帳かな
買ふ時にすつる顔なし魂祭
鬼灯はいかなる鬼のともしけむ
萩の戸や男の沓や女沓

仰て見る華なしや秋の空
庭の池妹が稻蒨袂かな
物の怪の知死期くや秋の暮
長き夜を初産に明す陀羅尼かな
茸狩や一つ見付けて野も山も

冬

澤鱗の缺も赤し今朝の霜
幾霜に伊勢の二の殿ふりにけり
河口や落葉も見せず寄り丸太
降るうちにまた異音の時雨かな
寒念佛晝は浮世に歸りけり
煤掃いて軒端の鳩も寝ねよいか
君が代や鬼に靜に年を越す

(俳諧瓜作のぼり鶴芭蕉袖草紙俳家奇人談三上吟むつ千鳥)

花摘

文章

瓜作跋

誰か云、枕草紙は此道の寶なりと、亦犬まくらもおかし、尤草紙はかの枕の文字のひとつ方を殘してとなり、枕の一方は尤にして尤にあらずと眉をひそめしも亦興ならずや、今其枕の屑を拾ひ集めて其誤に上塗をなし只友人なりもならずも嘲りあふのみ、(瓜作)

第二十八章 園女

第一項 傳記

略傳

園女は蕉門名高き才女也、伊勢内宮神官一有が妻なり、若くして夫にはなれ、貞操を守り再び人に嫁せず、蕉翁の門に遊で其名日域に高し、江戸深川に住す、俳家奇人談に、一年旅立て京洛を逍遙し、復江戸へかへり深川に在住して眼科を以て常の産とす、神官の妻たる故、法體を忌て韃

風の頭となる、其かたち甚美く、若き俳士談笑にことよせ、或は艶書をおくり戯言を吐く、園女うきことに思ひ、堅く男と席を同うせず、障子を隔て俳談す、後には大なる籠をつくり、是を身にかぶりて出席して談笑す、或説曰、園女は難波に生る、母にはなれて伯母なる人住吉の邊り遠里小



園女筆

(芭蕉門古人真蹟)

野に住しに育れて、十一才の年、其家の外面に美しき八重櫻ありて、花の頃は近きあたりの人群り、袖をつらね裾を引、詠めあへり、折節はむくつけなる野人心なく花を折取を、園女幼心に悲み一首の歌をへぎにつけて立てたり、めづるとも手折そ花のおしければと見るのみぞ家づとにせよ、此歌を見て心なきものまでも大に恥ぢらひて、それより折らざりしとなん、清涼が綾錦には伊勢の生れとかけり、是非を知らず、云々、(俳家奇人談に、勢州松坂の人享保の始、深川に卒す、俳家奇人談に享保八年六十才にして名を知鏡と改め、冠里公の母君へ仕へ、同十一年四月六十有三にして死す、俳

家百人撰に、享保十一年四月二十日七十四にて終る、六十餘才なり、今深川靈巖寺念佛堂の傍に墳あり、(長春隨筆)

夫

惟中故郷を出て浪花に移るの頃、ともに行て其妻となる、

(俳家奇人談)

園女といへば蕉門の女丈夫なる事は皆よく之を知れども一有が妻といひ又阿西惟中が妻なりともいひて誰も之を定めしものなし、園女が撰みたる菊の塵といふ集あり、そが自序の趣を察すれば一有にもあらず、惟中にもあらず、渭川といへる者なる事明かなり、

(俳諧明倫雜誌)

歌 俳

性質和歌を好んで風流あり、俳諧また美津女を師として其佳境に入る、云々、或時蕉翁行脚して來ると聞き、すなはち請招きて饗應す、云々、夫死してより東武へ下り翁に隨從す、翁歿して後は又晋子に依て學ぶ、

園

わがての道俳道に入りし初は、元祿二年の冬なり、(菊の塵)

(俳家奇人談)

第二項 性 格

閑 雅

廿六日園女亭なり、山海の珍味をもて饗應す、婦人ながら禮をたし敬屈の法を守る、貞潔閑雅の婦人なり、(花屋日記)

逸 宕

友人琴風が記に曰く、此女昔より世事に疎く、袖下の紅絹を切て下駄の鼻緒を調へ、張文庫の蓋を取て水ながしに用ふるなど、其跡方もなき事も風雅の上の興なりけらし、近き頃俳道に入て天窓丸たれど真中を十筋ばかり残せるも可笑し、(俳家奇人談)

第三項 著 書

自 著

菊の塵

俳友及びおのが連句發句を載せたり、素堂の跋あり、この書名は芭蕉が園を訪ひし時の句、白菊の目にたてゝ見る塵もなしよりとりたるなり、上下二卷、

後人の編述

園女句集

俳諧文庫第十篇大野洒竹校訂元祿名家句集附女流俳句集に出づ、

園女俳句集

永井孤秋編の女流俳家全集中にあり

第四項 作品

連句

寒梅に手をもとくなり小町桶	出
下り戸はづし乙雪を折	そ
鳥が鳴淺みに杭はゆり捨て	湖
難殿ならん石渡すらん	紫

たゞ有に懸練るけふの月

そ

の

傘を返すにころ柿の竹

そ

の

新鐘に山女引さく和爾堅田

そ

の

戀する身とは煎酒に鹽

そ

の

御紋付目にかゝれどもみねの雲

そ

の

そもく湯立正一位なり

そ

の

住は人茶筌作りの白兎公

そ

の

稀に夕間をさます卷栢

そ

の

琵琶に風實に其比の夏の月

そ

の

むたいな異見これに限らず

そ

の

楯勝手車に濁る田舎城

そ

の

徑に錢を握る忘然

青

紫

子もなくて花に味増こひ夫婦連

執

流

あけぼの袖のうす綿を引

紫

筆

發句

春

ゆづり葉の莖も紅さすあした哉
 難波女や何から問はむ事初
 糸島の襟引出して若菜摘
 梅を折る隣もあさき釣瓶かな
 氣の張らぬ入相聞いて梅見かな
 梅が香や慮外ながらも旅勞れ
 春の野に心ある人の素顔かな
 手ぐり舟風は柳にまかせたり
 青柳も宗祇の髭の匂かな
 いそがしや董を摘めばつくぐし
 鼻紙の間にしほむ董かな

(菊のちり)

駒鳥の聲ころびけり岩の上
 乙鳥にしほし預ける舎かな
 松山の間々や花の雲
 鳥の聲花ある方へ四方拜
 色あひも僅に春の夜明かな
 時雨てや花まで残る檜笠
 花の前に顔はづかしや旅衣
 蒲團まで朝の寒さや花の雪
 角びしの猿の酒でも花をゝろ
 ふとんまで朝の寒さや花の雪

戀

文書く間待たせて折らす櫻かな
 眠たがる人には見えそ朝櫻
 三絃の拍手にかゝる櫻かな

夜櫻や太閤様の櫻狩

出代も頭巾で行くや花の頃

ぬれつゝも藤沈みたる暮の色

山吹にいしう射たりや雀弓

山吹に川よりあがる車かな

山吹に馬乗出して六玉川

夏

更衣自ら織らぬ罪深し

あら美し卯の花は誰更衣

はや藤に酒こぼしけり更衣

卯の花や投げゆり様をほそ心

風かをれ風鈴の銘も小倉山

卷々の中に吹るゝ團扇かな

手枕や月は布目の蚊屋の中

祭近し入帆に續く幟かな

金にて鑄つべき顔や合歡の花

進出て瓜むく客の國咄

こゝろ見んと瓜に眉かく端居かな

涼風や餘所の鉦鼓に南無阿彌陀

負うた子に髪なぶらるゝ暑かな

けふ來ても何の傳授か夏神樂

秋

思へたゝ硯洗の後の耻

兀山に秋のとりつく山もなし

名月や琴柱にさはる栗の皮

名月や箔紙かゝる兒の顔

神壇やお百度打てけふの月

山深み赤い鶏頭や瀧の風

ひら薄輪にはる風や帆の餘り

迷子の親の心やすき原

二王にもより添ふ葛のしげり哉

風の名の付て吹きよる新酒かな

けふの菊朗詠集を御家流

世の人の知らぬ花あり深山椎

行秋や三十日の水に星の照

冬

近道を阿闍梨につるゝ時雨かな

この猿はやしる久しき時雨かな

戀

さゆる夜のともし火少し眉の劔

木枯にてぼれて牛の晝の聲

富士見えてさる程に寒き木間かな

しれものゝ舎りか寒しくぬぎ原

荒馬の師走の牧の寒かな

年よれば鼠もひかす寒かな

ある程の伊達し盡して紙子かな

辻つたか草足袋はいた物とがめ

葉の音に犬吠かゝる嵐かな

行年や老を賞めたる小町の繪

俊成の女とは誰年のくれ

(玉藻集、菊のちり、春と秋、陸奥千鳥)

文章

火 桶

露は秋、時雨は冬と見定めてや、こそくゝと反古とり出でゝ火桶一つを張りまはす、是は何の翁ぞ、俊成頼政をならふにも非ず、只この一人にて、我冬を過さむとなり、春より後はといはゞ、あらはあるまじ、破れなば

元の土にこそと、若し問はゞかく答ふべき

藤元の折敷の糊に一葉かな

(芙蓉文集)

第五項 言論

宗教と文學

答雲虎和尚

ある書の旨趣拜し申候、本求真不求妄大道の根源誰もなる所、憚ながら不斷一心深頭にのぼりての所作は柳緑花紅只其儘にして、常に句をいひ歌につゞりて遊び申事に候、無益の口業に候はゞ一切經も無益の口業にて候、法くさき事は嫌にて所作所行は念佛と句と歌となり、極樂へ行くはよし、地獄へ入ればめでたし、そこに更に無分別に候、申度事候へども歩行なり難く候まゝ御許し候へかし、

和玉韻

自己念其不覓心

法灯已耀一灯心

市中點々有前鏡

全識人間清淨心

誰か見ん誰か知るべき有にもあらず

無にもあらざる法のともし火

(俳諧温故集)

第六項 批評

涼袋

涼袋曰、風流の鐵腸、男女の情を忘る、園女が風流の至れる、感ずるにたへたり、大丈夫も及ぶまじ、(長春隨筆)

第二十九章 卯七

第一項 傳記

生國

向井氏、長崎の人、去來が弟なり、(猿蓑さがし)

號

號、牡丹亭、(俳林小傳)

第二十九章 卯七

第二項 性格

豪氣

高吟醉をすゝめ酣醉今に耽る、一句人を躍せずば死すともやまじと
いへる勇みありけり、(渡鳥集、丈草の後序)

第三項 著書

自著

「渡鳥集」

自己及同門の連句發句等を載す、晝夜二卷、

第四項 作品

發句

故郷は今ばかり寐や渡り鳥 卯 卯 去
 ひらきほのかに夜の明る月 卯 卯 七
 大木の榎木一本色つきて 卯 卯 七
 かくれまがひもなき御方なり 卯 卯 七

五器皿をしまへばいつも晝盛

うちかふせたる雪前の空

うい事は頬腫物のはやりかせ

そなたに人が戀をして居る

祭過ぎ月は次第に有明に

京へくと時鳥飛ぶ

百枚の撰も中々おもひ草

年は十六智恵は六十

前かたの手代小者もうちそろひ

きつうふけたる庚申のよさ

石部まで通しの駕籠をいうて来て

御食くやれとこゝら申呼ぶ

大分な今日の花見の出様かな

東風氣に成て暁はあふない

第二十九章 卯七

卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯

來 七 來 七 來 七 來 七 來 七 來 七 來 七 來

二こうくくと狐鳴行く春の霜

殿を遙に見て野雪隠

あたらしき草履草鞋腰につけ

ふらりと届く名月の文

女房衆の出ていなれしは去年の秋

稻も木綿もはひる最中

かき曇り雨は霰と降りかゝる

山伏獨り暮に失せけり

さる程に荷持も着きて椽の先

茶の煙草のと云うて約束

世の間は氣勢でやればやりすます

やつぱり元のこぬか商

十鴨川や吉田白川しらが谷

比叡の根風吹きたてゝ行く

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

來

來

來

來

來

來

來

目振るまに今日は朔日神無月

取出して見る物の古びる

田舎にて娘をだつる花の陰

末の頼みの躑躅山吹

發句

春

朧夜や出ぬけて松のからす崎

面白や正月まはり藪の梅

鶯の海むいて鳴く須摩の浦

鶯の松にとまりて鳴き直す

陽炎やちぎれてあそぶ波の上

見わたせば汝のたゝえや花の雲

花の雲世を一ぱいの入日かな

卯

卯

(渡鳥集)

來

來

來

來

有明に汐のたゞへや花の雲
桃散るや葛籠片荷の大工箱
瘦せくと成るや燕の旅衣

夏

立のぼる霧の日數や五月雨
江を染むる入日の前や雲の峰
寝つ起つ帆下にならぬ夏の月
風道に來ては寝ころぶ涼かな
涼しさよ堀にまたがる竹の枝
白鷺や夕立ぬけて松の上
爪紅の濡色動く清水かな
妻におくれける人に申侍る
紫のさむるや夢の花あやめ
家々の門や田植の仕舞歌

京入や烏羽の田植の歸る中
日もどりや烏羽に通ひて瓜作り
算盤も枕數なり竹婦人

秋

旅蚊屋の釣手わたすや天の川
風の根をてり付にけり秋の空
とち葉うつ豆も一夜の夜寒かな
薺のつぼみて渡す芙蓉かな
大空にきほひうつすや菊の霜
月もるや栲の下の墓参り
月影に砂のひかつく小八つ時
猪の鼻くすつかす西瓜かな
相撲殿待つ日になるや濱の市
一夜さもゆるして寝せぬかゞし哉

冬

初摺や日なたしに寄る小六月
 白雲や時雨かゝゆる町の上
 鳴渡る鶴の高さよ霜の月
 笠の雪猶首になりて惜まるゝ
 雪の日や里どまりする鶺鴒の聲
 泥雪とくるゝや年の門ならび
 大雪や里どまりするひわの聲
 鷹狩や侍衆の装の雪

(俳諧近古類題集、七部集、芭蕉袖草紙、草刈笛、韻塞、有磯海、續有磯海、笈日記、西華集、渡鳥集)

文章

遊簾雪庵

柳谷子の常に興せられしは、東の角に椎丸太の床を設け、青磁の瓶竹

の筒、門人の數有る寒菊のわりなく、水仙の思ひ切たる顔も折からの花
 とこそ、爐中に一樽のうつるを知らず、半にかへる道來かけに中の花あ
 り、八ツの鐘に枕を定め曉のひゞきに起あがりて、各此庵のことぶきを
 申されける、予も重て一句を留、其あそびを共にし侍る物ならんかし、
 目晴らしや昨日降たる山の雪

(渡鳥集)

第三十章 智 月

第一項 傳 記

略 傳

智月尼は江州大津驛の人、乙州が母なり、云々、師に向つて紙筆を備へ
 紙子の袖かき合せて、我に形見となるべき物書きて、殘し給へ、と望む、翁
 點頭ながらも、六十に近き尼に形見を乞はれていと力なし、と戯れなが
 ら、書きて與へしとなむ、是師の死期を豫め計り知れるにや、浪花よりそ
 の變を告來りしも、其年の事なりし、(俳家奇人談)



智月像

在俗時代

近江大津驛、佐右衛門が妻、少年何れの御所にか局役を勤め、歌路と呼しとぞ、(俳林小傳)

第二項 著書

後人の編述

「智月尼句集」

俳諧文庫第十編大野洒竹校訂元祿

名家句集附女流俳句集に出づ、

「智月尼俳句集」

永井孤秋編の女流俳家全集に出づ、

第三項 作品

發句

春

窓に手元休めむ流し元
 春風に塵もほどくる氷かな
 苔なる梅あたゝむる春日かな
 雪汁のぬくみ急げよ芝の花
 これでこそ命惜しけれ山櫻
 入相の鐘に瘦るか山櫻
 山櫻散るや小川の水車
 山彦や大津どまりの花の人
 我年のよるとは知らず花盛
 あふ坂や花の梢の車道
 溜池に蛙生るゝぬるみ哉
 山つゝし海に見よとや夕日影
 大和路の望の春も暮にけり

三

夏

宵寝して涼しく歩め朝のうち (史邦に別る)

廣庭にゆたかに開く牡丹かな

白牡丹子は幾人も持ちけれど

手鞠なら散るとも上れ飛び上れ

なぐられてこぼるゝけしや日の移

ひる顔や雨降り足らぬ花の顔

歌がるた憎き人かな郭公

ひる迄はさのみいそがす時鳥

逢坂やいとせきあふ蟬の聲

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙

秋

朝顔の咲くや親にも叱られず

兔貫に笠脱がしけり萩の花

川上で菜を洗うたぞ月の影

天水にたまる月影ま一盃

おろくくと向へば月の御光かな

立待や涼直さむ白の上

寐待月舟も静に行き次第

二あらばいさかひやせむけふの月

手をついて月さしのぞく松の間

きりくす鳴くや案山子の袖のうち

年よれば聲はかるゝぞきりくす

鳴出して米こぼしけり稻雀

淋しさを我物顔や秋の鳩

案山子にも哀さ負けじ尼仲間

冬

木枯や色にも見えす散りもせず
 見やるさへ旅人さむし石部山
 像の畫に物いひかくる寒かな
 はつ雪の疊さはりやしゆる筈
 わざとさへ見に行く旅を富士の雪
 いふまいと思へと吹雪死手の旅
 雪の夜や臙豆腐のなつかしき
 雪信が草花珍し冬でもり
 鉢たゞき夜更けて道の廣さ哉
 水仙の花の高さの日影かな
 我形のあはれに見ゆる枯野かな
 御火燒の盛物取るな村鳥
 流るゝや師走の町の煤の汁
 待春や氷に交る塵あくた

おしませて鶯一羽年のくれ

(七部集菊の香、玉藻集續有磯海、薦獅子集、柴橋山彦集花摘)

第四項 批評

許六

智月は一筋見えたり、乙州より遙に勝れたり、然れども仕習の朝より
 終焉の曉までの俳諧、五色のうち只一色を染出だせり、これは女の風雅
 なればなり、彼が風雅の美をいはゞ生涯の句ひたすら智月と言ふ尼の
 句にして、女の形を能く顯はせり、(俳諧問答)

第三十一章 乙州

第一項 傳記

身分

乙州(蕉門諸生全傳に乙州とあり)

知月尼の子、大津の驛長たり、(俳林小傳)

第二項 著書

第三十一章 乙州



乙 州 像

自 著

「それく草」

乙州の隨筆なり、趣味多し、上中下三卷、正徳元年の跋あり、

第三項 作品

連 句

八朔や脾の臍つよき柿食ひ 乙州
だゞくさにつむ籬木のから 北枝

(芭蕉堂所在三十六人肖像中)

つゞり虫静に見れば動き出

旅の月夜は物たらずなり

頃の點取ども、卷からげ

虚言つく人の顔をじろく

袴陰馬の焼鐵ふすぶらせ

盆の李を置こぼしけり

乙

枝 州 童 枝 州 童

州

乙

入御簾に跡戻りして覗くらん

しぼりつきたる涙さへうき

ちつくりと頭結ひける袴着に

雪はつもれと去ぬ物買

臍の垢ほり盡したる世の中や

のぼりくくて淀の晝船

水雲は島のうねを作るかと

式部が夢は泣いつ笑ふつ

月花は男なふりと詠むべき

酒とりにやる春の蛤蜊

雁歸る鉢ふせ峠あれやらん

宿の二階の裏はみな山

いつの日か障子に張りし人歩帳

額もぬかす角入れてより

乙

州 童 枝 州 童 枝 州 童 枝 州 童 枝 州 童

第三十一章 乙州

五二八

唐の芋料りまどひし夕間暮

かさある月の雲にかまはず

肌寒くなえたる衣のうすよこれ

つるしくとならず鱧口

夏來ては葉さまにくさる赤椿

小歌計のあがる所化寮

さがせどもとれぬ釣瓶に草臥て

行燈とぼす頃の村雨

怨靈の段讀返す昔本

涙もろける里の肝煎

いさかひてのがれ行くらん後つき

灸する日ともいへば風ひき

花の香の太秦迄も押移り

うかとはなかぬ小鳥窩

枝 童 州 枝 童 州 枝 童 州 枝 童 州 枝 童 州 枝 童 州

(卯辰集) (なほ路通連句の條下を見よ)

發 句

春

朧夜に引くや網場のからす貝

寝ぐるしき窓の細目や闇の梅

この儘に罪作る身の日は永し

見る所思ふ所やはつ櫻

咲花の中をぬけ出て尻つまげ

龜の甲乗らるゝ時は啼もせず

日燒田や時くつらく鳴く蛙

旅人の葬の供にや行く胡蝶

家鴨ぞと見られて安し春の夢

其春の石ともならず木曾の馬

夏

乙 州

第三十一章 乙州

五二九

雲の峠あまの羽衣干して見せ
 浮雲にまぎれても行く夏の月
 涼しげにすす屋が家の川柳
 小佛を集めて涼し浮御堂
 ぬか星や清水流るゝ西の岡
 水汲に跡や先やの螢かな
 螢谷出る螢の平かな
 汗かきの常夏くもる泪かな
 夏氣色返すくも鳴海渦
 森の蟬涼しき聲や暑き聲
 から蟬となるまで鳴くを仕事かな
 すゝ風や我より先に百合の花
 けし畑や散しづまりて佛在世
 曉の目をさませせよ蓮の花

雨乞や近江となりし川の數

秋

三浦には九十三騎や暮参り
 芭蕉葉の打かへされし月夜かな
 今日月に召るゝ神は何番目
 つぶくくと露けし居所の女郎花
 そばの花櫻の志賀の嵐かな
 水梨子やいく秋の野の露の味
 蓮がらのなほうそくと行方かな
 北州の人とならばや蓮のから
 夕陽や材木店もうす紅葉
 湯臭さやさび鮎かゝむ石の間
 虫よく鳴て因果が盡きるなら
 雷も衰ふ秋の行方かな

行秋を胡弓の糸の恨かな

馬かりて竹田の里や行しぐれ

冬の日に消ゆるやうなり沖の鳥

冬でもり鹿こそ人に食はるれ

日枝一つ前に置きたる雪見かな

水鳥の浪に鼻つくねぶり哉

置霜の敵を味方に水仙花

鉢たゞき憐は顔に似ぬものか

晝の晝夜の夜知る冬至かな

戀しさもなく寝られぬ師走かな

客人の心になりて年忘れ

(袖珍題詠集俳諧近古類題集芭蕉袖草紙七部集卯辰集薦獅
子集笈日記有磯海千鳥掛)

文 章

乙

州

古き人々のかはゆきには旅をさせよといひ傳へて、旅に出ては品々につらき事のみかは、宿々には持出る臥具は膝にも足らぬやうく、五錢七錢の借蒲團一つなり、かくはあれど、旅人より旅籠料とて極めたる外に禮錢出すべし、などいひもあへぬに、綿の厚き夜着臥具を與へて寒苦を防ぐに心なし、又油錢とて纒の志を見すれば、俄に居風呂の下もやしたて、茶は濃く煮て運び、あすの馬も安く約束し、あかしも魚燈ながら燈心太く、朝はゆるく、お立ち、御用あらば起し給へと、様々もてなす事をかしく侍れども、流石一夜のなじみとて名殘惜まぬにもあらず、十宿にやうく、二百錢の費にて其自由をなす事、旅に馴れたる人の旅を思ふは理なり、うきといふは旅に愚の言葉ならんか、

旅の道すがら曙の比、並木の松の間に茶釜のたぎる音は、靜にして勇まし、國境のひとしからぬは又覺束なし、

永き日に、出馬して旅人を待つとて、馬士は軒端に打もたれて、鏡を取出し、我と額をぬき暮し侍るに、馬も退屈するにや、馬士の方へ面をさし

向け鼻ふきしげくしけるに、馬士は怒て頓て鏡を馬の面へ指向け、かれが面をよく見よ、とかどくしくも、人馬の差別なき有様は、あはれといはん、悲しといはん、(それく草)

第四項 批評

許六

乙州が器も大方なり、第一師の恩によつて乙州といふ名は出たり、折衝血脈の筋を言へると雖、彼確には知るまじ、たとへば船に乗る人船中の前後も知らず寝たり、時に順風出で、着船したるが如し、翁の追善に木節と兩吟の俳諧、自慢する所の附合とて、路通が行狀記に出でたり、その巻に言ふ、發句も脇も師の噂なり、また奥に師の噂の句二句あり、かやうに一卷の中に、幾所も出して苦しからぬ格式ありや、知らずたまたま一句などは其恩を忘れぬ便ともいふべし、度々の事にてうるさく侍るなり、發句に目立たる事は、一卷の奥までも遠慮すべきなりと師説、

(俳諧問答)

第三十二章 曲 翠

第一項 傳記

畧傳

尼破鏡附曲翠

破鏡は、膳所の土菅沼外記(俳林小傳に、食録五百石)が妻なり、外記はば

せを門人にて、馬指堂曲翠(曲水ともい

ふ)といひて、俳諧をもて世にしらる、妻

は和泉岸和田の士の女にして、和歌を

好み、つくし箏の妙手なり、一とせ夫と

ゝもに故郷に趣き、播磨路を行めぐり

し道の記をかけるなど、文章もいとよ

しと、見しる人語られき、予も見んとほ

りすれどもいまだ探得す、外記は、傍輩



曲 翠 像

(芭蕉堂所在三十六人肖像中)

の曾我權大夫といへるもの寵を恃て、上下のためよからぬこととも重

り、人皆惡めどもせんかたなく齒を嚙しを、權太夫を除かん事屢同僚に謀るも、其威權に懼れ躊躇して同せず、一人足立新助といふ者志を協す、されど能く一人二人の之を企て及ぶ處に非ず、己が家に招き入、惡事を責て殺害し、其身も心靜に腹切て失しが、(俳林小傳に享保五年七月二十日卒ス)主君の非なる名を思みて、私の爭論にもてなしたれば、疾怒て、その子内記といへるが江戸に有けるも、自盡を命せられて家亡びぬ、されば今もかしてには語つたへて、忠誠を悲しむとぞ、かゝれば妻は尼になりて、勝津に隠れ住みもとより好めるうたをよみ、糸をならして、悶を遣りける、その箏の手今もそこに残りて、破鏡流といへりとなん、破鏡再び照さずといふ心をもて、薙髮の名につきけるも、貞操の意に風流みゆ、曲翠の名は聞へても忠誠の實はかくれぬ、まして妻は俳諧によらされば、その徒もしらぬ人多ければをしくて聞まゝにするす、(近世畸人傳)

第二項 作品

連句

木の下に汁も給も櫻かな

芭

蕉

西日長閑によき天氣なり

珍

蕉

旅人の虱かき行く春くれて

曲

水

はきも習はぬ太刀の鞘ひきまた

曲

蕉

月待て假の内裏の司召

曲

水

靱臼つくる杣が早業

曲

水

鞍置ける三歳駒に秋の來て

曲

蕉

名は様々に降りかはる雨

曲

水

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

曲

水

中にもせいの高き山伏

曲

蕉

いふ事を唯一方へ落しけり

曲

蕉

細き筋より戀つものりつゝ

曲

水

物思ふ身に物食へとせつかれて

曲

蕉

月見る顔の袖重きつゆ

曲

蕉

秋風の船を怖がる波の音

曲

水

雁行く方や白子若松

曲

水

千部讀む花の盛の一身田

曲

水

順禮死ぬる道の陽炎

曲

水

何よりも蝶の現ぞあはれなる

曲

水

文書く程の力さへ無き

曲

水

羅に日をいとほるゝ御かたみ

曲

水

熊野見たきと泣き給ひけり

曲

水

手束弓紀の關守が頑なに

曲

水

酒ではげたる頭なるらむ

曲

水

双六の目を覗くまで暮れかゝり

曲

水

假の持佛に向ふ念佛

曲

水

中々に土間に座れば蚤もなし

曲

水

わが名は里のなぶりものなり

曲

水

憎まれていらぬ躍の肝を煎り

月夜くくに明け渡る月

曲

水

花すゝき餘り招けばうら枯れて

唯四方なる草庵の露

曲

水

一貫の錢むつかしと返しけり

醫者の薬は飲まぬ分別

曲

水

花咲けば吉野あたりを驅廻り

虬にさゝるゝ春の山中

曲

水

(乙五二)

發句

春

白魚にすきても見えよ胸のくま

梅咲くや白の挽木の上きまがり

蛆の鱗を流す柳かな

鶯に辨の吃をせかせける
 念入れて冬からつぼむ椿かな
 陽炎のもえて田に散る椿かな
 陽炎のさだかに藍の田づら哉
 春雨や旅籠もとはで奥座敷
 据風呂に茶を運ばせて春の雨
 董草小鍋洗ひし跡やこれ
 片岨や麥にふり込む花の枝
 冷酒にのみつく比かもゝの花

夏

灌佛や躑躅ならぶる井戸の屋根
 若楓茶いろに成も一さかり
 泉の鳴きやむ岨の若葉かな
 若竹や煙の出づる庫裏の窓

菜種ほすむしろの端や夕涼
 ほとゝぎすせなか見てやる籠かな
 思ふことたまつてゐるかひきがへる
 中間の手に握らるゝ螢かな
 夏山や庵を見かけて二曲り
 壘屋も酔うて歸りし夏座敷

秋

村雲の橋ふみ越てけふの月
 十六夜の雲やしぐらむ蓼の花
 わせの香や田中の庵の人出入
 明星や尾上に消る鹿の聲
 口取も咳氣聲なり駒迎

冬

この月の時雨を見せよ鳩の海

宇治木幡京へ時雨てかゝる雲
 寒き夜や海に落込む瀧の音
 馬叱る聲も枯野の嵐かな
 水仙や練堀われし日の透間
 祐成鮓を食ふ時時宗は食はざりけり
 夷講我料理して知らぬ顔
 とひかへす話もなしや年忘

〔袖珍題詠集、俳諧近古類題集、七部集、芭蕉袖草紙、草刈笛錦繡
 綴、韻塞、有磯海、笈日記、薦獅子集、俳諧温故集、市の庵、花摘〕

第三十三章 酒堂

第一項 傳記

畧傳

濱田珍碩は近江瀬田の俳人なり、酒堂と號し、道々と稱す、元祿年間の人なり、〔俳林小傳〕

第二項 著書

自著

〔俳諧市の庵〕

元祿七年に酒堂が選みし俳諧集なり、一冊

〔深川集〕

酒堂の撰、同門の連句發句を載す、寛政二戌仲秋、西村源六板

この書もと西村養魚上梓せしが、回

祿にかゝり終れり、故に梅人更に杉風自筆の書をもちて校合し源六に上梓せしめしなり、

〔洒落堂記〕

芭蕉の洒落堂記卷頭にあり、酒堂其他の俳諧を添ふ、一冊、寫本

第三項 作品



酒堂像

連句

洗足に客と名のつく寒さかな
 綿館ならぶ冬むきの里
 鶴鶴階子の銚をつたひ来て
 春は其儘七草もたつ
 月の色氷ものこる小鮒うり
 築地閉のどに典薬の駕
 相國寺ぼたんの花は盛りにて
 椀の蓋とる蔭に竹の子
 西衆は若蕨つるゝ草まくら
 むかし咄に野良泣する
 きぬくは雲の踊に宿を着て
 東追手の月ぞすみきる
 青鷺の榎に宿す露の音

酒 許 芭 嵐 酒 酒 酒
 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂

ふたりの柱杖迹先につく
 乗掛は挑灯しめす朝かるし
 汝さしかゝる星川の橋
 村は花田面の艸の青み立テ
 塚のわらびの萌る石原
 薦僧は師に廻りあふはるの末
 今は敗れし今川の家
 うつり行後撰の風を續興し
 又まねかるゝ四國ゆかしき
 朝露に濡渡りたる藍の花
 よこれし胸にかゝる麥の粉
 馬かたを待戀つらき井戸の端
 月夜に髪を洗ふ揉出し
 火とぼして砦あてがふ子供たち

酒 酒 酒 酒
 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂 六 蕉 蘭 堂

第三十三章 酒堂

五四六

先積かはるとしの物成り

薄りと門の瓦に雪降りて

高観音にから崎を見る

今はやる單羽織を着つれ立

奉行は鍵に鶏もかくるゝ

鼓垣に木やり聞ゆる堀の内

日は赤ふ出る二月朔日

はつ花に伊勢の蛇のとれそめて

釣樟若やぐ宮川の上くわさぎ

(深川集) (なほ曲翠連句の條下を見よ)

酒

酒

蘭 蕉 六 堂 蕉 蘭 堂 六 蘭

發句

春

里までは送らぬ月や梅の花
鶯の聲を染めけり藍ばたけ

いそがしき春を雀の柿袴

春雨や蓑につゝまむ雉の聲

水音の野中淋しき柳かな

かげろふや誰鼻血たる石の上

花散て竹見る軒のやすさ哉

夏

菖蒲かけて見ばや五月の風の色

腰かけて中に涼しき階子かな

鶏に居替る陰や藪涼み

時鳥鳴や田植のみちすさみ

宵の間や芥子の苔に入る月夜

山吹も散るか祭の綱なまなます

秋

唐黍にかげろふ軒や玉まつり

第三十三章 酒堂

五四七

盆米や魂待つ軒に杵の音
 秋空や日和狂はす柿の色
 刈株や水田の上は秋の空
 松の葉を酔はせて行くや秋の風
 名月や誰吹起す森の鳩
 名月の海より冷る田蓑かな
 時もよし肥えたる馬に萩すゝき
 碓ひとりよき染物の匂ひ哉
 百菊の香をあつめてや後の月
 新酒や秋風渡る蕨の隅
 篠こえて来る人ゆかし鹿の脛
 冬
 神送あれたる雪の土大根
 幽霊に見しよ網代の瘦男

鹿の影尖つて寒き月夜かな
 鶏や枿たく夜の火のうづり
 佛名や饅頭は香のうす煙

(袖珍題詠集俳諧近古類題集、芭蕉袖草紙、薦獅子集、東華集、笈
 日記、節文集、市の庵、七部集)

文 章

俳諧市の庵序

市中に遊ぶものは家を定むべからず、家を定めて遊ぶものは鮑さ
 ゐの類ならん、去年の夏の夏この難波津に這へ出て田螺の蓋の明暮を思へ
 ば、魚賣る聲のほとゝぎすに紛れては、屢童の枕を驚かし、寒の頃の節季
 候に庭をこねらるゝも、餅つかぬ宿の思出にや、されば春秋の風情はい
 ふに乏しからず、市にも住み山にも住む、果は大水をのむ下地なるべし、

(市の庵)

第三十四章 路 通

第一項 傳記

畧傳

翁ひと、せ草津守山を過て、松蔭に行やすらふ、かたへを見れば、色白き乞食の草枕涼しげに菰はれやかに、げやりて、高麗の茶碗のいとふるびたるに、瓜の皮拾ひ入れ、やれし扇に蠅追ながら、一ねぶり樂しめるあやしくて、立どまりさし寄見れば、目をひらき又ふさぎ、所猶もとの如し、さわ何ものゝはふれにたる、おして名をきかまほしく、目のさむるまで腰うちかけ

晝がほに晝寢しようもの床の山

折からの吟も此時なり、所は琵琶の海近く、比良のねおろし蒸りくれば、並樹の古葉こぼれかゝりて、蟬の聲あたりをさらす、涼しともおもふほどに空たりたり、おのこすと起あがり、何夢や見つらん、脚をうちて、ひとり笑み居たるをゆかし、松風聞了午眠濃とはさとれる人の口ずさびなるを、今此人を見ることよと、こゝろおきせられ、近く寄てしかく、のあ

らましをとふ、おのこいとおかしがりて、君の財を費ものは、劔の下に眼をふさぎ、親のたからを費ものは、松原に袖を乞ふと、われ其袖を乞ものなり、只今出口の柳をくゞりて、襟にひやりとさめたる夢は、鴉の糞にてありしものを、むかしを手枕にたのしむ身は、八珍の舌打より瓜の皮の蟻をはらひて、朝夕無味の禪にほこる、御坊もしらざるところなりと、白き齒をあらはして笑ふ、翁荷へる晝筭をひらきて、この飯のいと白う味ことにすぐれたるも、人の食を乞るも同じ、われも亦乞食なり、たとへば柔なる褥にゆめ見濃なる衣に身を包むも、元よりわがものにあらざるを、しらは、この松がねも、相同じくかつげる、薦もひとしからん、只元をしるとしらざると、實に見ると假に見ると、是を迷悟の二義ともいふ、おのこもし吾にしたがはゞ、茶碗を旅籠屋の膳にかえ、薦をかり着の小袖にかえ、廓の夢を風雅にかえて、老の杖をたすけば、樂又その中にあらんか、のこらなづきて翁にむかひ、其晝筭を給はらんと、清水にひたじてこれを食ふ、首を叩て曰、誠にこの飯五味を欺き、咽に甘露を通すが如し、實雪

の日は寒くこそ、むまきはむまきに極りたれば、けふより御坊の言葉にそむかじ、さもあれむかし腰折をこのみて、三十一もじの數をもしる、御坊笑ひ給ひぞとて、矢立を乞て扇にしるす、手拙なからず見えて、露と見るうき世を旅のまゝならば、いつこも草の枕ならまし、翁歎じて云、われ伊城に在しとき、洛の季吟の歌枕をたゝき、敷島の道にいざなはれしが、今は俳諧の短に遊て、生涯の計とす、汝に路通の名を與へむ、汝にわが頭陀をかくすことなし、日も暮ぬしりべにしたがひ來れと、夫より師弟のあはれみ深く、しばらく蕉門の人なりし、(蕉門頭陀物語)

後志に違ふ事ありて、姑く師弟の中絶えたり、然れども翁終焉の頃は又其罪を許さる、(俳家奇人談)
濃州の産、大坂に住す、八十村氏、(猿蓑さがし)

第二項 著書

自著

俳諧勸進帳 月山發句合

路通 月山に在りて、呂丸と共に十八番の句合に評をしたるもの、元祿四年編

「芭蕉翁行狀記」

路通が元祿七年の冬、三井寺に於て、蕉翁の最後の旅行より臨終までの様を記述したるもの、文甚悲哀なり、これに追善の俳諧を添へて、寛延四年九月鶴本平藏上梓せり、

第三項 作品

連句

へばりつく冬草の戸や菜雜水

綿からふるふ霰ころく

とつかりと風吹あとはけもなく

雲にぬるみのかゝる月影

袴着て都の秋の自身番

買はれて籠のきりくす鳴く

路通 巴水 乙州 路通 州水

ウ急ぐとて川原を横に歩み行

杖を刀に腰にさしそへ

うらみても格子に額つき合せ

頃日見たる夢の書付

白銀の福々しきを撰置きて

いやが上なる茗荷咲なり

如何なれば惣領殿は無器用に

峠に場をとる墓のつみ石

丸木橋これも琴にとよまれたり

心の筋や疝氣ひきつる

月花に赤蠟燭の片なだれ

角根かゆがる春日野の鹿

ナのだかさや法論味附はこぶ葛鉢

風ばまをたるわらの前當

路

水通

路

水通

路

水通

路

水通

路

水通

路

水通

路

水通

飛乗に福浦の舟の便乞て

信太ひとさしを舞うて鼻ひる

あたまから鐵砲無盡判を續

女夫の様に抱かれ合ふ友

小便に敷居をぬらす小はづかし

蘭の匂のめつたにぞする

朗詠を裡に習ふ秋の野邊

月むつくりとしかも形よく

鎖明る御手なし御所のくゞり口

顔瘦せてさへ匂ふまゆずみ

ウ業作る無間の山は眞闇に

時鳥鳴てさつと降雨

ちからづく粥のねばりの腹心

襟にてぼるゝ月代のふけ

路

通

路

水通

路

水通

路

水通

路

水通

第三十四章 路通
花の雲鐘は上野か浅草か
きりくめぐる春の中日

五五六

(鷲獅子集)

州

發句

春

何をしてはや七草をたく音
つみすて、踏付がたき若な哉
鎧にも散るは覺ゆる櫻かな
大佛のうしろに花の盛かな
我儘をいはする花のあるじ哉
肌の上き石に眠らむ花の山
ゆかしさはいくつ角出す濱の芦
彼岸までさむさも一夜二夜哉
鳥共も寝入てゐるか余吾の海

夏

衣更や白きは物に手のつかず
まづ二人雛からふえて幟まで
鳴の巢の見えたりあるは隠れたり

秋

芭蕉葉は何になれとや秋の風
名月や草の庵のあたま敷
芦の穂や招くあはれより散るあはれ
一泊り見かはる萩の枕かな
萩の芽の露もなじまぬ夕かな
花鳥に并ぶ柏の紅葉かな
蜘蛛の巣のこれも散り行く秋の庵
うるはしき稻の穂なみの旭かな
實なるより油につもる榎の實かな

第三十四章 路通

五五七

冬

親もたぬ身はとしくの寒かな
隠家や寢覺さらりと笹の雪
きゆる時は氷もきえて走るなり
水仙のひる間を春に得たりけり
いねくと人にいはれつ年の暮

(袖珍題詠集俳諧近古類題集七部集芭蕉袖草紙蕨獅子集卯辰集俳諧温故集花摘)

文章

桃の雨

塚本如丹住于駿州島田驛其風騷相續到于玄孫今呼桃舟
如丹といへる名はさのみ故あるに非ず若かりし程より西東行きか
ふ人の中に因多く知るべある方には心よく見えて大井戸わたりかぬ
たる水の上にも思ひしづますかるらかに身の程をもてなせば舟にひ

としくいはむも便なきに非ず俳諧の句は時にのぞみて興あり樂ある
ものなれば學ぶとはなくて折々につぶやきて又笑ひ笑はれて罪なき
事を悦ぶ一昔さき無下につたなき比より契りて草の枕の心休め所と
樂みしに中比芭蕉庵の翁も此しるべに立寄られ聊老身を養ひ發句手
すさみのうつし繪など侍りしも今は夢の世となり其折の友とちに如
竹などいへる好人も一つ年の冬みまかられ六年に及べりこの十年ば
かりは西の國に在て久しふりにて廻り來りしにはや事あらたまり品
かはりたる事のみ有りて見し人も數少ういとけなきは臍たけたり島
田の井手の蛙こそせめてかしてまり飛出ても鳴く様なりものいはぬ
桃の花盛りながら昔覺えて雨うちそゞ日しきりにもよほされて
十年を語り盡くすや桃の雨

(芙蓉文集)

第三十五章 風 國

第一項 傳 記

畧 傳

洛の人、去來の甥、泊船集の撰者也、(俳林小傳)

第二項 著 書

自 著

「菊の香」

風國著、一冊本、蕉門の句集にて處々に註を施したり、元祿十丁丑九月

井筒屋出版、

「泊船集」

芭蕉の遺稿の句文を輯めたるもの、五卷三冊、元祿十一年十一月、井上

屋庄兵衛板、

第三項 作 品

連 句

(支考の連句の條を見よ)

發 句

春

こちらなが東坡の顔上梅の花

猫の戀風のおこらぬばかりなり

鶯の影法師長き小壁かな

うぐひすの問答でなく内野かな

笠のはのあらはれつうせつ花の中

駒鳥の聲を見かへす格子かな

山吹や粟餅ちぎる軒廻り

松原に風を残して汝干かな

吹風に所定めぬひばりかな

青柳にのまるゝひなの屏風かな

夏

すゞしさを松の古葉をとり盡す

子規我をたゝせて初音かな

雨の間を鳴ふさぎけり郭公
 手分して青葉を出るか郭公
 若竹に去のこりてや四十雀
 ねぢ直す日和に赤き牡丹哉
 青雲や車落る社若
 三日月に車の音や麥の中
 浮雲のはるれば瓜のさかりかな

秋

秋來ぬと桔梗刈萱賣にけり
 海山の心くばりや今朝の秋
 籠かきの佛見事や魂まつり
 木まくらにはなれ兼てぞ月見かな
 名月や寝ぬ所には門しめず
 松の葉や細きにも似ず秋の聲

やゝ寒み茄の花も梢かな
 秋もはや暮るゝと知らず飛ぶいなこ
 帯ほどたばねて來たり草の花
 釣竿をとり置いて見んそばの花
 この盆はとりこのこされて穂蓼かな
 初雁や顔もちあぐる茶湯客
 タぐれは鐘を力や寺の秋

冬

物賣の急になりたる寒さ哉
 かも川の一瀬になりて寒哉
 芋ほりに男はやりぬむら時雨
 小坊主や雪見の供をこけ廻る
 人聲や霧たちこめて大根引
 雪になる空かゝへけり夷講